

還相回向の表現

稻葉秀賢

## 目次

一 『敦行信證』の構成……………	五
二 還相回向の表現……………	三
(イ) 還相回向の直接的表現……………	六
(ロ) 眞佛土卷の根源的表現……………	八
(ハ) 化身土卷の具體的表現……………	九

## 一 『教行信證』の構成

『教行信證』の構造を考へる場合、本書が「教」「行」「信」「證」「眞佛土」「化身土」といふ六卷から構成されてゐることは、單なる形式の問題としてのみでなく、そこに六卷全體を貫く有機的關係があることは、種々の觀點から注意されて來たことである。然し、同時に六卷の構成に有機的關係を見出す努力に眼を奪はれて、『教行信證』全體を貫く基本的文脈が見忘れられたといふ恐れはなかつたであらうか。その顯著な例として、こゝで採りあげたいと思ふのは、還相回向の問題である。

『教行信證』が六卷の構成を以て、淨土眞宗をあらはし、その六卷の構成に重要な意味のあることは勿論であるが、たゞその全體を貫く文脈に注意して、六卷を假に一巻に攝めて考へると、まづ第一に注意せられるのは、

「謹按淨土眞宗有二三種回向、一者往相二者還相」

と明された總標二種回向の文である。この文に依て、淨土眞宗をあらはす綱要が二種の回向であることを否むことはできない。そして二種回向が淨土眞宗を示す綱要であるといふことを推求の基礎とする場合、「教卷」の始めから、「證卷」の四法を明し終つて、

「夫案眞宗教行信證者如來大悲回向之利益、故若因果、無有<sub>レ</sub>一事非<sub>レ</sub>阿彌陀如來清淨願心之所<sub>レ</sub>迴向成就、因淨故果亦淨也應<sub>レ</sub>知」

と總結せられた文は、まさに淨土眞宗を示す綱要としての往相回向を明すに就いて、

「就<sub>レ</sub>往相回向有<sub>レ</sub>眞實教行信證」

と云はれたものを受けたのである。何故なら、四法の中行信は因であり證は果だからである。次に

「二言選相回向者則是利他教化地益也」

といつて、選相回向を明す已下は、總釋に

「二者選相」

と云つたのを承けたことは明かである。従つて六卷といふ分巻に縛られないで、六巻を一巻に攝めてみる場合、これより已下全巻を終るまでは、選相回向を明すものと見ても差支ないばかりか、それこそ總標二回向の文を生かすものである。さう見た場合に、化巻の終りに後序を終つて、更に

「安樂集云採集眞言助修往益、何者欲使前生者導後、後生者訪前、連續無窮願不<sub>レ</sub>休止、爲<sub>レ</sub>盡無邊生死海、故上爾者末代道俗可<sub>レ</sub>仰信敬也<sub>レ</sub>可知、如<sub>レ</sub>華嚴經偈云、若有<sub>レ</sub>見菩薩修<sub>レ</sub>行種々行起<sub>レ</sub>善不善之心、菩薩皆攝取」

と『安樂集』の連續無窮に往益を成就せしめんと云はれた文、及び『華嚴經』の、それは源信が『往生要集』下末三八に引用して、更に

「當<sub>レ</sub>知生<sub>レ</sub>誘亦是結緣、我若得<sub>レ</sub>道願引<sub>レ</sub>攝彼、彼若得<sub>レ</sub>道願引<sub>レ</sub>攝我、乃至<sub>レ</sub>菩提互爲<sub>レ</sub>師弟」

と述べられた意に依て、それが選相回向の意を總結せられたことを感知することができるのではないであらうか。

勿論こゝでは、從來「化巻」が前五巻に對向して、眞假批判の基盤をなし、從て眞實の四法乃至は六法に對して、方便の四法乃至は六法を明すと見る見方とが絡みあつて、「化巻」が如何にして選相回向の内容を顯すと見られるか、大きな課題となるであらう。然し、この點に就いては、「化巻」が方便化身土と名づけられて、「眞佛土巻」に對し、

「眞佛土卷」から開出されたことに着目すれば、自らその意は明かにせられるのであつて、その點に就いての詳細な論述は後に譲らねばならない。

かくの如く往還二回向が全體的組織の綱要となることは、『略本』を對照すると愈々明かにせられる。即ち『略本』では

「本願力回向有ニ種相、一者往相二者還相」

といつて、往還二回向がその綱要となつてゐる。こゝに本願力といふのは、眞實之教淨土眞宗を顯す『大無量壽經』の宗致であるから、淨土眞宗に二種回向ありと云つても、本願力回向に二種の相ありと云つても同じことである。それ故に、兩本の明し方は大體同じ經路を辿るのであつて、兩本ともに往生の因たる行信を結んで、

「爾者若行若信無有<sub>レ</sub>一事非<sub>レ</sub>阿彌陀如來清淨願心之所<sub>レ</sub>回向成就、非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>因他因有<sub>レ</sub>一也」

と云ひ、又往生の因果共に他力なることをあらはして、各眞實證を明し終つて、「若因若果」一事として阿彌陀如來清淨願心の回向成就し給ふ所に非ることなきを明してゐる。然るに『略本』にあつては、還相回向を明し終つて、

「爾者若往若還、無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>一事非<sub>レ</sub>如來清淨願心之所<sub>レ</sub>回向成就也、應<sub>レ</sub>知」

といふ結文を置いてゐるが、それが『廣本』にはない。たゞ「證卷」の結文に

「爾者大聖眞言、誠知、證<sub>レ</sub>大涅槃、藉<sub>レ</sub>願力回向、還相利益顯<sub>レ</sub>利他正意、是以論主宣<sub>レ</sub>布廣大無碍一心、普徧開<sub>レ</sub>化雜染湛忍群萌、宗師顯<sub>レ</sub>示大悲往還回向、愍憫弘<sub>レ</sub>宣他利々他深義、仰可<sub>レ</sub>奉持、特可<sub>レ</sub>頂戴<sub>レ</sub>矣」

と云つてゐるのみである。そしてこゝで注意を要するのは、「還相利益顯<sub>レ</sub>利他正意」と云はれた言葉であつて、その利他の正意といはれるものが、單に前來『論註』を引用して開顯せられた菩薩利他の行としての還相の利益のみ

を示すのであるか、更には次に展開する「眞佛土卷」「化身土卷」を含めて「利他正意」と云はれたか、何れであるかといふことである。若し前に述べたやうに後序の後に引用せられた『安樂集』や『華嚴經』の文に、還相回向としての「利他正意」を結ぶ意味があるとすれば、それは後にも及ぶと考ふべきではないであらうか。殊に『略本』にある如き往還共に如來回向であるといふ結文が『廣本』にないことは、『廣本』が形式的に『略本』ほど整つてゐないことを示すのであつて、これは『廣』『略』二本の撰述の前後の問題に就いても、重要な暗示を與へるものであつて、それを『略本』との對照に於いて、更に確めてみよう。

従來、『廣』『略』二本の相異に就いて、『廣本』は四法に二回向を攝し、『略本』は二回向に四法を攝する所明であると云はれて來た。蓋し『廣本』は特に還相回向卷といふものを開かず、それは「證卷」の後半にのみ明されてゐる如くに見える。従て『廣本』の綱格をなすものは眞實四法乃至は六法であつて、それに「化卷」が對向的に示されて方便の四法乃至は六法が明かされ、それ故に二回向は却て四法の中に包れてゐる如く見える。それ故に『略本』の如くに、往還共に如來回向であるとす結文もない。と説明されて來たのである。之に對し『略本』は二回向に四法を攝する所明であるから、往相回向に還相回向が對向し、四法はたゞ往相回向の内容として顯はされるに過ぎぬから、その往還を結んで

「爾者若往若還無有<sub>レ</sub>一事非<sub>三</sub>如來清淨願心之所<sub>二</sub>回向成就<sub>一</sub>也、應<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>」

といふ結文が置かれたのであつて、それは二回向に四法を攝する明し方だからである。この見方はたしかに道理に契つたものであるが果してそれだけで問題はないのであらうか。

思ふに、「證卷」の後半に

「一言ニ還相回向ニ者則是利他教化地益也」

と云はれたのは、總標ニ回向の二者還相を受けたものであることは明かであり、それは先に述べた如く、本書の終り迄を含むものと見られないであらうか。何故ならば、『略本』は『廣本』に對比すれば、後者が教相を明かにする書であるに對し、前者は安心を示す書であると云はれ、從て『略本』には眞假批判といふことはなく、たゞ眞實の法のみが説かれてゐるその相違を無視することはできないにしても、『略本』から省みて、「化卷」の内容が利他教化地の内容であることを暗示せられる點があるからである。即ち『略本』にあつて、往還ニ回向を結んで

「是以淨土緣熟調達闍世興ニ逆害ニ、濁世機憫釋迦韋提選ニ安養ニ、情思レ彼靜念レ此、達多闍世博施ニ仁慈ニ彌陀釋迦深顯ニ素懷ニ

といふ文が置かれてゐる。之は明かに『廣本』總序の教興の所由を明す文と云はれるものに相當してゐる。そしてその後、『廣本』「證卷」の結文と同じく

「依レ之論主宣ニ布廣大無碍淨信、普徧開ニ化雜善堪忍群生、宗師顯ニ示大悲往還回向ニ懇勸弘ニ宣他利々他深義ニ

と云ひ、更に

「聖權化益徧爲レ利ニ一切凡愚、廣大心行唯欲レ引ニ逆惡闡提ニ

と云つてゐる。かくてこゝで注意せしめられることは、『廣』『略』二本を照應せしめると、「是以淨土緣熟」云々の文は、『廣本』の

「爾者大聖眞言、誠知、證ニ大涅槃ニ藉ニ願力回向ニ還相利益顯ニ利他正意ニ

と云ふ文に相應してゐることである。これから推求せしめられることは、こゝに「利他正意」の内容となるものが「達多闍世博施仁慈」、彌陀釋迦深顯素懷」といはれる『觀經』の所説であるといふことである。そしてこのことは、「賃思<sub>レ</sub>彼靜念<sub>レ</sub>此」ことに依て、宗祖が受けとられた歡喜の内容ではないであらうか。若しさうであるとすれば、「化卷」は眞假相對すれば假の四法を明すものであるけれども、その方便の四法が常に眞實の四法に入らしめる爲の聖權化益であつて、それに依て一切凡愚たゞ廣大の心行に歸して、逆惡闍提の身すら救はれるのは全く還相の利益利他正意に外ならぬ。と感知せられるのである。勿論『觀經』のみが化卷の所明ではない。そこには「聖道諸機淨土定散機」と云はれる假のものも、又「六十二見九十五種邪道」と云はれる僞も含れてはゐる。然し、それらを代表するものが『觀經』であつて、そこに「化卷」が持つ廣い意味も明かにせられるのではないであらうか。

『略本』に「達多闍世博施仁慈」といふ達多闍世は、『廣本』では、「斯乃權化仁」と云はれてゐる。そしてその權化の仁に就いては、夙に善導が『觀經』の「汝是凡夫心想羸劣」の文を根據として、韋提希等が實業の凡夫であることを主張して、

「夫人是凡非<sub>レ</sub>聖、由<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>聖故仰<sub>レ</sub>惟聖力冥加彼國雖<sub>レ</sub>遙得<sub>レ</sub>覩、此明<sub>レ</sub>如來恐衆生置<sub>レ</sub>惑謂<sub>レ</sub>言夫人是聖非<sub>レ</sub>凡、由<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>疑故即<sub>レ</sub>自生<sub>レ</sub>怯弱、然韋提現是菩薩假示<sub>レ</sub>凡身、我等罪人無<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>此及<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>斷<sub>レ</sub>比疑<sub>レ</sub>故言<sub>レ</sub>汝是凡夫也」(『序分義』三四)と云ひ、以て諸師が韋提希を大權の菩薩とする誤解を強く楷定したことは餘りにも有名である。然るに宗祖は宛も善導の見解を逆轉して、諸師の立場に返るが如く、「權化の仁」と主張せられた。それは單に總序のみならず、『淨土和讃』にも

彌陀釋迦方便して、

阿難目連富樓那韋提



達多闍王頻婆娑羅

香婆月光行雨等

大聖おの／＼もろともにも、凡愚底下のつみひとを

逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり

と詠つてゐられるところである。かうした宗祖の見解は果して善導の立場を諸師へ逆轉せしめるものであるかに就いて、宗祖の見解は決して諸師のそれに同ずるのではなく、却て善導の立場と意を同じくすることが注意せられてゐる。即ち宗祖と諸師では、同じ果上の菩薩としつつ、その内容は全く異なるのであつて、諸師は果上の菩薩といつても、從因向果の菩薩であるが、宗祖に從へば從果向因の還相の菩薩なのである。即ち善導はその深い宗教的自覺の立場に於いて、如來の本願がひとへに惡人凡夫の爲のものであり、若し韋提希が凡夫でないならば、『觀經』は聖者の爲の教となり、凡夫の救はるゝ教法ではなくなることを洞察したのであつた。それ故に韋提希の上に濁惡の自己を旨出し、如來の本願が全く自己の爲のものであることを喜んだのである。宗祖は却て同じ宗教的自覺に立つが故にこゝろ、かゝる極惡底下の自己の爲に、善巧攝化の大悲があらはれたのが王舍城の悲劇であるとして、かゝる悲劇にあらゝれた人々を大聖と仰ぎ、權化の仁と見られたのであつて、その深い自覺的立場に異るところはない。かくて、宗祖が『觀經』の教説を以て還相回向の内容と見られたことは明かであり、そこに「彌陀釋迦深顯素懷」と云はれる意味もあるのであつて、それは後に明かにするやうに、『觀經』に代表せられる假も僞も、還相回向の内容と見られ得るのではないであらうか。それ故に、『略本』に於いて、往還二回向を結んで、『廣本』總序の教興を示す文が出されるのは、それに依て、還相回向の内容の多含性を示すものであり、從て『廣本』の二者言還相回向者といふ標文が已下全體に延びゆく廣義のものであることが理解せられるのではないであらうか。

思ふに還相回向は利他教化地の益であるから、その内容は本質的に無限定的な廣さを持つものである。こゝに我々は還相回向が往相回向との對向に於いて、如何にあらはされてゐるかを知らねばならない。

還相回向が「證卷」の後半に明されてくるのは、それが眞實證の内容としての利他教化地であるからであつて、「證卷」の中に明されてくるから證の中に還相の大用が攝せられるといふ意味ではないであらう。寧ろ、「證卷」から發して利他教化地の世界が限りなく展開するのであつて、その根源は何處までも眞實證になければならない。然らば、眞實證から如何にして還相利他の大用が展開するのであらうか。

宗祖は證卷に於いて、

「謹顯眞實證者則是利他圓滿之妙位無上涅槃之極果也」

とあらはされた。『略本』では

「言證者則利他圓滿妙果也」

と示され、何れもその極果が無上涅槃であることを顯してゐる。即ち利他の言は他力回向の意をあらはし、圓滿は極速圓滿であつてそれが彌陀の妙果と異なるものでないことが表示せられてゐる。殊に『法事讚』下二八に

「彌陀妙果號曰無上涅槃」

とあるに對照すれば、眞實證が無上涅槃の極果であるから、それが彌陀の妙果と異なるものではないことは明かである。然もかくの如き眞實證は正定聚之機（信卷）が難思議往生（證卷）を遂ぐることに依て得る證果であるから、それは一應衆生に屬しつゝ彌陀の證果と異らぬところに、それが利他圓滿妙果と云はるゝ所以があるのである。かくてその眞實證を獲得することは、信樂の一念に極るが故に

「然煩惱成就凡夫生死罪濁群萌獲<sub>二</sub>往相回向心行<sub>一</sub>即時入<sub>二</sub>大乘正定聚之數<sub>一</sub>」  
と現益を示し、

「住<sub>二</sub>正定聚<sub>一</sub>故必至<sub>二</sub>滅度<sub>一</sub>」

と當益に及び、その滅度に就いて

「即是常樂、常樂即是畢竟寂滅、寂滅即是無上涅槃、無上涅槃即是無爲法身、無爲法身即是實相、實相即是法性、法性即是眞如、眞如即是一如」

と轉釋して、それが無上涅槃の極果であることを示すと共に、無上涅槃の内面的性格が如何なるものであるかゞ示されたのである。

然るに次に

「然者彌陀如來從<sub>レ</sub>如來生示<sub>二</sub>現報應化種々身<sub>一</sub>也」

といつて、彌陀が從如來生の佛であることが示されてゐる。この言葉は一見非常に唐突の如く見え、先輩の苦心せられた點である。然るにこの文を『略本』に對應せしむるに、滅度を轉釋して、

「必至<sub>二</sub>滅度<sub>一</sub>即是常樂、常樂即是大涅槃、大涅槃即是利他教化果、是身即是無爲法身、無爲法身即是畢竟平等身、畢竟平等身即是寂滅、寂滅即是實相、實相即是法性、法性即是眞如、眞如即是一如也」

とあつて、涅槃を利他教化地果と釋してゐられる。この利他教化地果は、還相回向を利他教化地益と云はれたのと同じ意味であるから、涅槃は即ち還相回向の益といふ意味でなければならぬ。されば滅度常樂の證果を得るところに、自ら還相回向の益を示現すると示すのがこの「然者彌陀如來云々」の文である。

從如來生といふ語は、假に根據を求むれば『大經』下(科本一四右)に淨土の菩薩利他の徳を嘆じて

「從如來生ニ法如々ニ」

とあつて、從如來生は淨土の菩薩の徳である。『唯信鈔文意』一右に

「法性のみやこより衆生利益のために、娑婆界にきたりたまふゆへに、來をきたるといふなり、經には從如來生とのたまへり」

とあるのは、この意味である。

更に「報應化種々身」とあるは、下の還相回向を明すに就いて、最初に『論』の利行満足章の文を擧げてゐるが、そこには

「以ニ大慈悲ニ觀察一切苦惱衆生ニ示ニ應化身ニ、回ニ入生死園煩惱林中ニ遊ニ戲神通ニ至ニ教化地ニ」

とあつて、そこに應化身を示すことが教化地の相であることを明してゐるのであつて、これは明かに還相回向の内容である。

『高僧和讃』に

「願土にいたればすみやかに

無上涅槃を證してぞ

すなはち大悲をおこすなり

これを回向となづけたり」

と云つて、無上涅槃から種々の身を示現して還相利他のはたらきが自然に起るのを、「大悲をおこす」と云つてゐる

られる。これを『唯信鈔文意』<sup>七</sup>右には

「このさとりをうればすなはち大慈大悲きはまりて生死海にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを普賢の徳に歸せしむといふなり、この利益におもむくを來といふ」

と云つてゐる。これは明かに普賢の徳として還相利他のはたらきを示したものである。

然るにこゝに問題となるのは、彌陀如來とあつて、淨土の菩薩とは示されてゐない。少くも往還二種の利益が信樂の一念に與へられることは、信樂の一念が既に如來の回向、他力眞實の信心であるから、その信心の利益として正定聚の機に與へられるものである。まことに

「南無阿彌陀佛の回向の

恩徳廣大不思議にて、

往相回向の利益には

還相回向に回入せり」

である。従て教相の上から云へば、還相利他のはたらきは如來に依て信心の行者に與へられるものであり、それは往相の行者が得る眞實證の自らなる發動である。従て淨土の菩薩が持つ利他教化と彌陀の利他教化のはたらきとは、内容的に異なるものではないにしても一應教相的には區別せられねばならない。然らば宗祖は還相利他のはたらきを示すのに、何故に彌陀の利他のはたらきを擧げられたのであらうか。

思ふに彌陀が衆生救済の本願を起し給ふ所以は、「ちかひのやうは無上佛にならしめんとちかひたまへるなり」『末燈鈔』<sup>(一四)</sup>右)であつて、こゝに無上佛といふのは無上涅槃のことであるから、無上涅槃の證りに至らしめんが爲であ

る。然るに無上涅槃は、先の轉釋の示すが如く、眞如であり一如であつて、心言不及と云はねばならぬ。それ故にこそ、彌陀如來如より來生して、報應化種々の身を示すことに依て無上涅槃を知らしめ給ふのである。されば、『法華讚』の「彌陀妙果號曰無上涅槃」とあるを、「利他圓滿妙位、無上涅槃極果」とあらはし給うた宗祖の意趣は、眞實の證が主伴不二彌陀同體の證果なることを示すと共に、その無上涅槃の内面的意義を彌陀に托して示されたのである。まことに眞實の證は彌陀同體の證果なればこそ、利他眞實の證果たり得るのである。そしてこの眞實證は還相回向の利他のはたらきが缺けては眞實たることができず、却て報應化種々の身を示現する還相利他に於いて、無上涅槃の極果が明かにせられるのである。それ故にこの文は還相回向を開く伏線として、それが「眞佛土卷」、「化身土卷」に展開するので、この二卷が「證卷」から開出されるといふのも、それが眞實の證の展開と見られるからである。

かくて彌陀如來如より來生して一切衆生をして往生淨土せしめ、無上涅槃の證果を得しめ給ひ、釋迦世に出興し給ふ所以も亦八萬四千の法門を説いて、衆機を調熟し、遂に無上涅槃に到らしめ給ふのである。善導が『玄義分』序題門に

「然娑婆化主因<sub>ニ</sub>其請<sub>ニ</sub>故、即廣開<sub>ニ</sub>淨土要門<sub>ニ</sub>、安樂能人顯<sub>ニ</sub>彰別意之弘願<sub>ニ</sub>」

と云つたのもこの意味であつて、『觀經』に代表せられる「化卷」が還相回向の具體的表現として味得せられる所にも、その淵源はこゝにあると云つていゝ。

因に「示現報應化種々身」に依て大涅槃を示すといふに就いて、圓乘院師は『廣文類聞誌』九四頁に大涅槃の大を

『大乘義章』の説に依て體相用の三大で解し、體大とは周遍法界の自性清淨の涅槃、相大は方便涅槃で斷惑して萬徳を具足する意、示現報應化種々身を用大として、一如は體大、阿彌陀如來は相大、利生の益の無盡なる應化を用大と

解してゐる。かくて眞實の證は彌陀の用大と同じく、利生極りなき還相利他のはたらきを持つのであつて、このことを離れて無上涅槃はないのである。

「證卷」のかくの如き體勢に於いて、還相回向が開かれてくるとすれば、還相回向の内容をなすのは、單に「證卷」のみに止らず、それは遠く「眞佛土卷」「化身土卷」に及ぶことが許されなければならぬ。古來二回向四法の關係に就いて『教行信證』の教義を論ずるに因果門の扱と二回向門（自利々他門）の扱あることが注意せられ、『廣本』は因果門を主とすると云はれてゐる。<sup>①</sup>即ち因果門の場合は行信の因に依つて得る眞實證は自利々他圓滿の證果であることを示して、還相回向は「證卷」に攝せられる。之に對し二回向門の場合は還相回向は四法の外に出て、四法は往相回向の内容となる。『廣本』が『略本』の如く絶對門でなく、眞假批判の相對門であるといふ立場からは、因果門が『廣本』の所明で、前五卷は眞實の教行信證、「化卷」は方便の教行信證を明すこととなるであらう。然し還相回向を明かにしようとするならば、我々は二回向門の扱ひを忘れてはならないし、絶對門の立場が『廣本』にないといふことは云へないのであつて、そのことは更に後に觸れるであらう。然らば、二回向門に立つて、還相回向の表現が、「眞佛土卷」「化身土卷」に互ると見た場合、還相回向は如何に表現せられてゐると見られるであらうか。

① 『教行信證研究』住田智見、四八二頁

## 二 還相廻向の表現

還相回向の表現せられてゆく過程を、大體三段に分けることができる。即ち、第一は「證卷」の後半、まさしく還相回向を直接的に表現する部分であつて、これを還相回向の直接的表現と呼んでいゝであらう。從來はたゞこの部分

のみを選相回向と見たのであるけれども、前來の所論に基いてそれを擴充する時、「眞佛土卷」は、所歸の身土を明すことに於いて、無上涅槃の根源が明かにせられてゐるのであるから、これを選相回向の根源的表現と名づけていふと思ふ。更に「化身土卷」は、從來注意せられて來たやうに、それはたとへば眞實に對し假と偽を簡別するのみでなく、却て假と偽にすら積極的意味を認めて、從假入眞の過程を示したものであるから、そこに大悲の善巧攝化の意を見ることができざる筈である。そしてこの大悲の善巧攝化こそ、無上涅槃の用大であつて、淨土の菩薩の所證が眞實證としての大涅槃である限り、淨土の菩薩にもその徳はある筈である。若し然りとすれば、「化卷」の從假入眞の過程をそのまま選相利他の化用と見て差支ない筈である。從て「化卷」は選相回向の具體的表現と云つていふのではないであらうか。かうした意味に基いて、選相回向が如何に表現せられてゐるかを検討したいと思ふ。

#### (4) 選相回向の直接的表現

「證卷」に明さるゝ選相回向は、まさにその直接的表現と云ふべきものであつて、それに依て選相回向の態が如何なるものであるかと示される。それに就いて、廣略要の過程のあることが先哲に依て注意されてゐる。即ち要とは最初に引用せられた

「淨土論曰出第五門者以ニ大悲悲ニ觀ニ察一切苦惱衆生ニ示ニ應化身、回ニ入生死園煩惱林中ニ遊ニ戲神通ニ至ニ教化地、以ニ本願力回向ニ故是名ニ出第五門」

といふ『淨土論』回向門の文であり、略とは次に續いて引用せられた

「論註曰選相者生ニ彼土ニ已得ニ奢摩他毘婆舍那方便力成就、回ニ入生死稠林ニ教化一切衆生ニ共向ニ佛道、若往若還皆爲ニ拔ニ衆生ニ渡ニ生死海、是故言回向爲ニ首得ニ成ニ就大悲心ニ故」



といふ『論註』下(左五)の起觀生信章に回向門二種を分つ還相回向の文であり、更に廣とはその後、更に廣く引用せられた『論註』觀行體相章已下の八章の諸文である。さればこの廣略要の三文を以てまさしく還相回向の態が明されるのはあるが、その本源に溯れば勿論第二十二願でなければならぬ。それ故に、

「二言<sup>ニ</sup>還相回向<sup>ニ</sup>者則是利他教化地益也、則是出<sup>レ</sup>於<sup>ニ</sup>必至補處之願、亦名<sup>ニ</sup>一生補處之願、亦可<sup>レ</sup>名<sup>ニ</sup>還相回向之願<sup>ニ</sup>也」と云はれたのであつて、こゝで注意しなければならぬことは、利他教化地益と云はれた益の言と、それに照應して擧げられた願名、從て二十二願の内容である。

思ふに往還二相の對向は、往相證果の體より還相の悲用を分ち出す意味であつて、その對向は内面的である。それ故に今「利他教化地益」といふのは、眞實證を承けて、證果の用をあらはせるものである。それ故に『略本』には「利他教化地果」とも示された。往相の證果に還相の悲用を具するが故に、果體より悲用を分つて教化地益と云ひ、それがそのまゝ次の願名に照應するのである。即ち、こゝに擧げられた三の願名の中、必至補處之願と一生補處之願とは、諸師に通ずる願名であり、還相回向之願は宗祖已證の願名である。然も前二は意は一であるが、後の願名は全く前者と異なるが如く見える。之に就いて、二十二願に二の願事を認め、一は等覺の位を極めて一生補處に住せしめるもので、前の二願名はこれに基く。二には普賢の徳を修して衆生を度せしめるを願事とし、還相回向の願名はこれに基くとする説がある。然し、一願に二の願事を認めることは、何れの願事が願の正意であるかを定めることができず、又今の場合、普賢の徳に依て還相の名を立てるならば、等覺補處は還相でないかといふ論難を生ずるであらう。『淨土和讃』に

「安樂無量の大菩薩

還相回向の表現

一生補處にいたるたり

普賢の徳に歸してこそ

穢國にかならず化するなれ」

とあつて、それは一生補處の淨土の菩薩の徳を讚嘆せるものである。こゝでは明かに一生補處と普賢の徳とは別なるものではない。まことに一生補處と自在の所化とは別なるものではないのであつて、共に還相回向の化用を示せるものである。たゞ一生補處は因の究竟を顯はすが故に證果の體に屬し、自在所化はその體より發動する悲用に屬するが故に、體用の關係を示せるものである。故に、宗祖はこれらの三願名を擧げて、還相の悲用が證果の體に具する利他教化益なることを示されたのである。かくて還相の悲用はまさしく二十二願の回向成就であることを示して、「則是出<sub>レ</sub>於<sub>ニ</sub>必至補處之願<sub>コト</sub>と云はれたのである。

然るに宗祖は、願名を出すのみで願文を出さず、

「願<sub>ニ</sub>註論<sub>一</sub>故不<sub>レ</sub>出<sub>ニ</sub>願文<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>披<sub>ニ</sub>論註<sub>ニ</sub>」

と云つてめられる。蓋し前來の引文の慣例に従へば、必ず因願成就或は異譯をも並び引くのが常である。それにも拘らず、『論註』を披くべしと云つて、願文を出さざるのは何故であらうか。

凡そ『論註』に二十二願文の引用せられた個處は二ある。一は『論註』下(二〇)に未證淨心の菩薩、菩薩の進趣階級を経ずして上地の菩薩と身等しく法等しきやと問へるに答へて、二十二願文が引用せられてゐる。二には『同』下(二三)に、十八、十一、二十二の三願を的證して、「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」の所以を釋する文とである。今宗祖が「註論に顯れたり」と云はれたのは、何れの個處を指すのであらうか。蓋し、今還相回向としての利他教化地

益を明す證文であるから、まさしくは三願的證して早作佛の所以を明す文を指すことは明かであるが、同時に不虛作住持功德に依て、身等しく法等しき淨土の徳をあらはすことに依て、淨土の極證を示す前者の文をもその中に含むものと云つていゝであらう。而して、宗祖が特に三願的證して、二十二願文を出された個處を意味せられたことが如何にして推知せられるかと云へば、往還相對してかの三願的證の文を考へるに、十八願は往相の因、十一願は往相の果である。而して二十二願を選相とするのはこの往相の因果に對して還相を明すものと見るのであつて、それは廣本に於ける四法三願の法相に同ずるものと云はねばならない。即ち七十八十一の三願を以て教行信證の四法を明し、十七願（行）十八願（信）は是因であり、十一願（證）はこれ果である。還相はまさしくこの果體より出づる悲用であつて、特に別法の存する意味ではない。還相回向も、「眞佛土卷」、「化身土卷」も共に「證卷」の眞實證から開出せられたものに過ぎない。それ故に、今願文を引かずたゞ『論註』を披閱して、還相回向が二十二願意に基くことを知らしめる爲に、特に「顯註論」故不<sub>レ</sub>出願文可<sub>レ</sub>披論註」と云はれたのであつて、この『論註』を披くべしと言はれたことは、特に注意しなければならぬ。

然も次に宗祖は『論註』を引かずして、論文の利行満足章の文を引いてゐられる。これは何故であらうか。

この論文は、「復有<sub>二</sub>五種門<sub>一</sub>漸次成<sub>二</sub>就五種功德<sub>一</sub>」と云つて五功德を明し、前四功德は入功德即ち自利を、第五門は出功德即ち利他を成就すると云ひ、この第五門即ち園林遊戲地門を明す文である。従てこの第五門が自利成就の極證に基いて利他を成就する悲用であることは明かであつて、この論文こそ、まさに還相回向の眞實の態を明せるものである。それ故に宗祖はこの論文を以て直ちに二十二願の意趣を示すものと見て、寧ろ願文に換へて引用せられたのではないであらうか。それに依て還相回向の眞實の態が明かにせられると共に、『論註』の還相回向を明す諸文が、

そのまゝ『本論』に基くことも明かにせられたのである。それは更に延いて『論註』の諸文が二十二願の註解でもあり、その願意を明證する意味をも持つのである。

かくて要の論文に對し、略の『論註』下(右)の文は、回向門を釋するに就いて往還二種の相ありと云ひ、出第五門の意に基いて還相を明せる文であるから、それは論文を更に具體化するものといふことができる。まことに還相とは彼土に生じ已つて、「奢摩他毘婆舍那方便力成就」してと云はるゝ如く、無上涅槃を證して定慧平等止觀不二の證果に於いて根本智を成就し、それより善巧方便力の後得大悲を顯はして、穢國に還來し衆生を教化して佛道に向はしむることである。それ故に「若往若還」とは願作度生、凡てかくの如き大悲心を成就せんが爲であると示されたのである。そしてこの還相の意趣が觀行體相章已下の諸文に廣く説かるゝことゝなつたのである。

最初に説かれるのは、「觀行體相章」の佛八種功德の終、不虛作住持功德の文(論註下一九)である。不虛作住持功德とは、偈に「觀<sub>ニ</sub>佛本願力<sub>一</sub>、遇無<sub>ニ</sub>空過者<sub>一</sub>、能令<sub>ニ</sub>速滿<sub>ニ</sub>足<sub>一</sub>、功德大寶海」と云へるものであつて、それを長行には、「即見<sub>ニ</sub>彼佛<sub>一</sub>未證淨心菩薩畢竟得<sub>ニ</sub>證平等法身<sub>一</sub>、與<sub>ニ</sub>淨心菩薩<sub>一</sub>與<sub>ニ</sub>上地諸菩薩<sub>一</sub>畢竟同得<sub>ニ</sub>寂滅平等<sub>一</sub>故」と釋されてゐる。それは未證淨心の菩薩が安樂世界に生れて、阿彌陀佛を見奉れば、速かに寂滅平等身を得ることを明せるものである。故にこれを二十二願の願意に照應せしむれば、一生補處の徳相を示すものであつて、平等法身の菩薩が得る報生三昧は菩薩の果報徳であつて、不動同時に遍く十方世界に到つて任運自在に一切衆生を度脱することができるのである。これ平等法身の證體に具する悲用であつて、この文が還相利他の證文とせられる所以である。こゝに淨心の菩薩とは平等法身を得る八地已上の菩薩であり、この菩薩は寂滅平等を證するが故に果報徳として自在に十方の諸佛を供養し、一切衆生を開化することを得るのである。之に對し未證淨心の菩薩とは七地已還の菩薩であつて、この菩薩は

供養諸佛開化衆生しても、必ず作心して三昧に入るを要するのであつて、八地已上の菩薩の如く任運自在たることを得ない。然るにこの未證淨心の菩薩も彼土に生れて阿彌陀佛を見奉れば淨心上地の菩薩と身等しく法等しきを得るのである。

然るに菩薩の進趣階級に多劫の功勳を要することは、既に『十地經』の定説である。今淨土に生れて阿彌陀佛を見奉れば、未證淨心の菩薩と上地の菩薩と畢竟平等であるとすれば、淨土に生れて阿彌陀佛を見奉るものには、十地の如き差別は存しないのであらうか。これに就いて『論註』では、淨土の菩薩は即ち等しきのではなく畢竟じて等しいのであつて、それは淨土が平等の境地であり、寂滅の世界なるからである。そしてその證明として二十二願文が引用せられ、『六要鈔』(會本六二〇)に依れば、諸位速疾超越の益をあらはさんが爲と指示せられてゐる。そしてこのことは、既に曇鸞が淨土の性功德に就いて、淨土が「隨順法性不乖法本」の本の義を持ち、法藏菩薩が諸波羅密を積集せられた積集の義が性の義であり、又法藏菩薩の無生法忍を得る位即ち聖種性の性であり、更には海性一味の必然不改の義を以て性を説明せられたことを想起せしめる。こゝに聖種性とは八地を指すとは又『論註』の注意するところである。そしてかくの如き土徳が全く佛法不思議に歸せられてゐる。かくて淨土の菩薩は畢竟じて寂滅平等の法を得て、任運自在な開化衆生のはたらきを持つのであつて、こゝに淨土の菩薩が常倫に超出して諸地の行現前し、供養諸佛開化衆生の普賢の行徳を任運に修し得ることがこの二十二願の文に依て明かにせられたのである。然らばかくの如き寂滅平等身を證せる淨土の菩薩が修する普賢の行徳は、如何なる姿に於いて示現するのであらうか。

それを明すものが次に引用せられた菩薩の四種功德である。『論』(左)には

「觀<sub>二</sub>彼菩薩<sub>一</sub>有<sub>二</sub>四種正修行功德<sub>一</sub>」

と釋してゐるが、この正修行に就いて、『論註』には

七〇

「眞如是諸法體、體如而行則是不行、不行而行名三如實修行、體唯一如而義分爲四」

と注解せられてゐる。まことに淨土に生れて寂滅平等の法を證れる菩薩が修する大悲行は、眞如を體としてなさるゝ修行であるから、行に四種の差別が分れてゐても、その體は唯一の眞如である。何故なら淨土の菩薩は大涅槃の極證を得るのであるから、根本智を以て眞如平等を照し、照し已て後得大悲を起し、衆生救済の大悲行を修するからである。即ち一如法界の理から流出する平等の根本智が後得大悲を顯現する上に四種の差別を生ずるのである。それ故に淨土の菩薩の正修行は根本智に即した後得大悲であるから、不行而行であり如實修行である。然らばかゝる後得大悲の上に顯現する菩薩四種の大悲行は如何なるものであらうか。

一 不動遍至の徳、この菩薩四種功徳に就いては、『論』の上に特に功徳成就の得名がない。これ恐らくは四種であつて、四種に分たるべきものでないからであらう。従てこゝに用ひるのは、その内容に従ふ隨宜の名稱に過ぎない。この徳は四種功徳の一であると共に、他の三をその中に攝する總の徳と云はるゝものである。蓋し淨土の菩薩は寂滅平等を證るが故に八地已上の菩薩であり、その果報徳として、一念同時に遍く十方世界に到り、供佛度生することを得るのである。即ち平等法身を得るのであるから、その體を云へば平等無差別であるけれども、また縁に隨て差別無量となる眞如法性を證つてゐる淨土の菩薩は、一身に即して無量身、不動にして遍至の徳を具し、任運自在に開化衆生することを得るのである。

二 同時利生の益、さきの不動遍至の徳が空間的に無導自在なる大悲行を示すとすれば、これは時間的に自由なる利生の徳を明したものである。即ち淨土の菩薩は一念の頃に偏く十方世界に到つて種々の佛事をなすことができること

を示したのである。

三無餘供佛の徳、淨土の菩薩が普く十方世界に到つて佛事をなすことは、既に第一の不動遍至の徳にあらはれてゐるけれども、こゝでは特に無餘の二字に重點を置いて、淨土の菩薩の供佛讚嘆が一切世界の諸佛大會と、更にその一々の世界に於ける無量の佛會に、一として餘すことなくゆき渡ることを示したのである。そして『肇論』序分の文を引いて、法身形なきが故に形ならざるなきが如く、佛音聲無きが故に聲ならざるはなく、等と任運無功用の菩薩利他の益を説いてゐる。

四遍示三寶の徳、上來の三種功徳は普く十方の有佛世界に於ける利益であるが、この第四は淨土の菩薩が有佛の世界のみならず、更に十方無佛の世界、即ち三寶なき處に於いても、三寶弘通の佛事を作すことを明せるものである。蓋しこれに依て不動遍至十方の意味が徹底せられ、法身不遍といふ如き批難をなからしめることができるのである。

かくて菩薩四種の徳は、一生補處の菩薩の徳を示すものであつて、この四種の菩薩莊嚴こそ還相回向の具體的内容を的證するものである。そして淨土の菩薩が一生補處の高位の菩薩であることは、これを園林遊戯地門の釋に對應するに、その菩薩の本願力を釋して、

「示<sub>下</sub>大菩薩於<sub>レ</sub>法身<sub>中</sub>常在<sub>三昧</sub>而現<sub>中</sub>種々身種々神通種々說法<sub>上</sub>」

といつてゐる如く、それは大菩薩即ち八地已上の菩薩であつて、この菩薩の任運無功用的な正修行こそ還相回向の最も具體的な相狀と云はねばならない。宗祖がこれに依て還相回向を示された趣旨を知るべきである。

然らば次の淨入願心章は如何なる意味を持つのであらうか。淨入願心とは淨土の三種莊嚴凡て法藏菩薩因位の願心に基くものであつて、願心清淨なるが故に、その因に依て成就せられた三種莊嚴も亦清淨なりと表はすものである。

即ち淨土の三種莊嚴は法藏菩薩の四十八願に示される清淨願心を因として成就せられたのであつて、淨土の菩薩が任運無功用に開化衆生の大悲行を成就する四種功德も、法藏菩薩因位の清淨願心に基くといはねばならない。而も願心の因が清淨なるを得るのは、その願心が廣（三種莊嚴）略（一法句）相入自在を得たまへる法藏菩薩の願心なるが故である。即ち如來の大悲願心は、衆生の無明に對向して、種々の莊嚴功德を生ずるけれども、それらの莊嚴は盡く一如の法性へ攝入すべきものである。一如法性を體として淨土の菩薩の正修行が行はるゝ如く、一如法性に攝入することに依てのみ、特に莊嚴功德が清淨願心の回向成就であることが明かにせられる。『論』に淨土の三種莊嚴を「略説入一法句」と説かれたのも、この三種莊嚴が願心莊嚴なるが故である。若し願心の莊嚴でないならば、三種莊嚴は一法句に入ることを得ず、三種莊嚴を一法句に入らしめる清淨願心こそ、一法句をそのまま三種莊嚴たらしめるのである。かくて法藏菩薩の清淨願心のみが廣略相入せしめるのであつて、この廣略相入を明かならしめる爲に、法性方便二法身の説が出されたのである。即ち、

「何故示<sub>レ</sub>現廣略相入<sub>一</sub>、諸佛菩薩有<sub>二</sub>種法身<sub>一</sub>、一者法性法身<sub>二</sub>者方便法身<sub>一</sub>、由<sub>レ</sub>法性法身<sub>二</sub>生<sub>レ</sub>方便法身<sub>一</sub>、由<sub>レ</sub>方便法身<sub>二</sub>出<sub>レ</sub>法性法身<sub>一</sub>、此<sub>二</sub>法身異而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>分<sub>一</sub>、一而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>同<sub>一</sub>、是故廣略相入統以<sub>レ</sub>法名<sub>一</sub>、菩薩若不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>廣略相入<sub>一</sub>、則不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>自利々他<sub>二</sub>」

と云へるものがそれであつて、まづこゝで注意せられねばならぬのは諸佛菩薩といふ言葉である。蓋し廣略相入は自利々他圓滿の彌陀の證果をあらはすと共に、その彌陀の證果が又淨土の菩薩の證果であることを示すところに諸佛菩薩と云はれた所以がある。而してその諸佛菩薩に法性法身と方便法身の二身あつて、よく自利々他することができるのである。何となれば、法性法身は所證の理であり、方便法身は能證の智である。能證の智あるが故に苦惱の衆生



を知つて、能く度衆生の利他を行ずることができ、この能證の智はまた所證の理に歸して、よく廣略相入自在を得るのである。こゝに「由<sub>二</sub>法性法身<sub>一</sub>生<sub>二</sub>方便法身<sub>一</sub>」と云ひ、また「由<sub>二</sub>方便法身<sub>一</sub>出<sub>二</sub>法性法身<sub>一</sub>」と云つて、由出由生の言が用ひられてゐる。これに就いて圓乘院師は、生とは起、出とは顯なりと云ひ、法性法身は體、方便法身は衆生を利他する用であつて、今體から用を起すが故に、「由<sub>二</sub>法性法身<sub>一</sub>出<sub>二</sub>方便法身<sub>一</sub>」と云ひ、また方便法身は所證の理として性であり、方便法身は能證の智として修であるから、修に依つて性を顯す意を「由<sub>二</sub>方便法身<sub>一</sub>出<sub>二</sub>法性法身<sub>一</sub>」と云つたのである。眞實之教『大無量壽經』の始終は全くこの意味を示したのであつて、法性の域より法藏菩薩と出で給うたのは、體より用を起すものであり、世自在王佛の所にして四十八願を發し、その願成就して、阿彌陀佛とならせ給うたのは、修に依て性を顯はし給うたのである。されば『唯信鈔文意』一七左には

「しかれば佛について二種の法身まします、ひとつには法性法身とまふす、ふたつには方便法身とまふす、法性法身とまふすはいろもなしかたちもまします、しかればこゝろもおよばずことばもたえたり、この一如よりかたちをあらはして方便法身とまふす、その御すがたに法藏比丘となりたまひて不可思議の四十八願をおこしあらはしたまふなり、この誓願のなかに光明無量の本願、壽命無量の弘誓をあらはしたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方無碍光如來となづけたてまつりたまへり、この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如來とまふす、すなはち阿彌陀如來とまふす。」

と云つてゐる。かくの如く彌陀は法性法身を全うして方便法身を示現し、盡十方無碍光如來とあらはれて無碍の光明を以て一切苦惱の衆生を自在に救濟し給うたのである。而して法性平等の所證の理より方便法身の相をあらはして發し給へる四十八願なるが故にこの願清淨であり、法性清淨の性より顯はるゝ大悲の願心なるが故に、願心また清淨で

ある。願心清淨なるが故に三種莊嚴もまた清淨であるとあらはすのがこの所明である。

これに依て宗祖は、淨土の廣略自在なる證果が、既に諸佛菩薩に二種法身ありと示された如く、單に如來の證果に止るものでなく、凡聖善惡の差別なく、淨土に往生せるものゝ得べき大涅槃の妙果であることを示すと共に、かくの如き妙果を得るが故にこそ、淨土に往生するものは悉く二種の法身を得て、心の儘に衆生救済の利他活動をなし得る還相回向の相狀を示すものとせられたのである。これをまた唯信鈔文意左には

「かならず大涅槃にいたるを法性のみやこへかへるとまふすなり、法性のみやこまふすは法身といふ、如來のさとりを自然にひらくなり、さとりひらくときを法性のみやこへかへるとまふすなり、これを眞如實相を證すともいふ、無爲法身ともいふ、滅度にいたるともいふ、法性の常樂を證すともいふ、無上覺にいたるともまふすなり、このさとりをうればすなはち大慈大悲きはまりて、生死海にかへりいりてよろづの有情をたすくるを普賢の徳に歸せしむといふなり」

と云つてゐられる。まことに大涅槃を得ることは法性の域に歸ることであり、このさとりを得れば大慈大悲きはまりてよろづの有情をたすくるのであつて、こゝに連續無窮なる還相證果の妙用が明かにせられる。

かくて淨入願、心章が還相回向の明證として役立つ所以は、一には還相の用きの清淨自在を得るのはひとへに因位の誓願清淨なるに基くを示し、二には、廣略相入の道理を二種法身に約して理智不二を示すことに依て、自利々他圓滿の證果なることをあらはし、この廣略相入を知ることについて、自利々他圓滿の妙果を得て、還相の無窮なる大用に至ることを示されたことにある。

かくの如く還相回向の大用が證大涅槃の妙果から必然的に發動するとするならば、還相利他の大用は、往相證果の

具徳として、證果そのものの中に内含せられてゐるはずである。然らば、それが内含せられてゐるといふ意味は如何に理解せられるであらうか。この意味を明かにするものこそ、善巧攝化、障菩提門、順菩提門、名義攝對、願事成就の五章に及ぶ『論註』の引用文である。

善巧攝化とは、『論』に

「如<sub>レ</sub>是菩薩奢摩他毘婆娑那廣略修行成<sub>ニ</sub>就柔軟心<sub>ニ</sub>」

と云へるものこれである。こゝに柔軟心とは廣略の諸法の不二を知る心であり、自他不二の心である。然るに『論註』の回向門の釋、それは既に還相回向の略を示すものとして注意した文であるが、それには

「還相者生<sub>ニ</sub>彼土<sub>ニ</sub>已得<sub>ニ</sub>奢摩他毘婆娑那方便力成就<sub>ニ</sub>、回<sub>ニ</sub>入生死稠林<sub>ニ</sub>教<sub>ニ</sub>化一切衆生<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>佛道<sub>ニ</sub>」

とある。この兩文を對照せしむるに、此土と彼土との差はあれ、何れも奢摩他毘婆娑那を修して二利不二の大悲を起すことに於いては全く同じである。それ故に還相の因はまさにこの善巧攝化に求められることが注意せられるであらう。

思ふに、『論』の所明にあつては、願生淨土の行としての五念門を明すに就いて、菩薩の廣略相入の觀を示して、願生行者の自利の行成就を示したのが前來の所明である。いま善巧攝化章はかくの如く自利成就せる菩薩の利他の行を示すのであつて、それ故に論文にあつても、前來は善男子善女人と五念門を修する願生行者としてその主體が示されたに對し、こゝに到つては「如<sub>レ</sub>是菩薩」と云ひ、善男子善女人は菩薩と言ひ換へられてゐる。これに就いて夙に『顯深義記』(五四三)に三義を立てゝゐることは餘りにも有名である。即ちこゝに善男子善女人といはず、菩薩とあるのは、

一、聖者の往生に約す。

二、法藏菩薩に約す。(『二門偈』)

三、除其本願の未得淨心の菩薩の行業に約すれば還相回向也。

といつて、『註』の意は、回向を釋して往還二種の相を示す還相の釋がまさに已下の文義であると云つてゐる。まことに善巧攝化已下の五章はまさしく回向門の釋であるが、それは入の前四門に對する出の第五門であるから、菩薩利他の大用であることは云ふまでもない。かくてこの回向門を釋するに就いて二義あることが注意せられねばならない。即ち、

一は約本の義と云はるゝもので、衆生の往還咸く如來の回向に由ることを示すものであつて、まさしくは『二門偈』の所明であり、廣略二本の處々にその意を見ることができぬ。

二約末の義と云はるるもので、末は願生行者であつて、「回向有二種相」として明される五念門の修相としての往還二回向である。

而して善巧攝化とは彼土に生じ已つて、柔軟心を以て廣略止觀成就して、能く二諦を知り根本後得の二智具足し、己を外にして他の爲にすることである。かくの如く廣略諸法を知るが故に、根本智を成じて後得智を起すを巧方便と云ひ、衆生の虚妄を知ることにて於いて、無縁の慈悲を起し、又實相無爲法身を知ることにて於いて究竟の歸依を起すのである。従て巧方便回向とは、禮拜等の五種の修行に集る所の一切の功德善根に於いて、自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんが爲に、一切衆生を攝取して、共に同じく安樂國に生ぜんと作願することである。こゝに禮拜等の五種の修行とあるのは、淨土に於いて彼の五種の修行に集むる一切功德を自の受樂の爲にせず、衆生に施與して三

有の苦を脱せしめる巧方便回向であつて、こゝに還相菩薩の利他度生の義が彌々顯著である。何となれば、こゝで衆生に回施する功德は四種の行徳であるべきに、それを五種といつたところに、それが還相菩薩の利他に外ならぬ意を見ることのできるからである。まことに、自身の受樂の爲にせず、一切衆生の爲に利他することは淨土の大菩薩にしてよくなし得る所である。

然るに『註』にあつては、『大經』三輩生の文に基いて

「雖<sub>レ</sub>行有<sub>レ</sub>優劣<sub>レ</sub>莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>皆無上菩提之心、此無上菩提心即是願作佛心、願作佛心即是度衆生心度衆生心即是攝<sub>レ</sub>取衆生<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>有佛國土<sub>レ</sub>心、是故願<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>彼安樂淨土<sub>レ</sub>者要發<sub>レ</sub>無上菩提心<sub>レ</sub>也」

といつて、上求下化の菩提心を以て還相の菩薩の清淨願心の相を示してゐる。蓋し無上菩提心は願作佛心であり、究竟の極證を求める自利の心である。然るに眞實の自利は利他を以て始めて究竟するのである。まことに下化なくして上求を成ずるものなく、上求を期せずして衆生を度することもあり得ない。それ故に願作佛心度衆生を具する大菩提心こそ還相菩薩の清淨願心の相を示すものであり、その相こそ自身住持の樂を求めず、たゞ己が所集の一切の功德を以て、一切衆生に施與して共に佛道に向はしむるのである。そしてこの還相菩薩の清淨願心の相を開示したのが三種菩提門相異の法と、三種の隨順菩提門の法である。三種の菩提門相異の法とは、

一 「依<sub>レ</sub>智慧門<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>自樂<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>離我心貪<sub>レ</sub>著自身<sub>レ</sub>故」

二 「依<sub>レ</sub>慈悲門<sub>レ</sub>拔<sub>レ</sub>一切衆生苦<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>離無<sub>レ</sub>安<sub>レ</sub>衆生<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>故」

三 「依<sub>レ</sub>方便門<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>愍一切衆生<sub>レ</sub>心遠<sub>レ</sub>離供<sub>レ</sub>養恭<sub>レ</sub>敬自身<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>故」

であり、又隨順菩提門の法とは

一 無染清淨心以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>自身<sub>一</sub>求<sub>レ</sub>諸樂<sub>上</sub>故

二 安清淨心以<sub>レ</sub>拔<sub>二</sub>一切衆生苦<sub>一</sub>故

三 樂清淨心以<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>一切衆生得<sub>二</sub>大菩提<sub>一</sub>故、以下攝<sub>二</sub>取衆生<sub>一</sub>生<sub>レ</sub>彼國土<sub>上</sub>故

である。この二門は勿論、障菩提門、順菩提門とも云はるゝ如く表裏の關係にあるものであつて、前の三種の障菩提門を離れる時、自然に後の順菩提門が成就されるのである。されば、智慧慈悲方便は、無染清淨心、安清淨心、樂清淨心に對應して、

一 は自身任持の爲に自樂を求めざる自利を離れる心、即ち智慧心であり、

二 は一切衆生の苦を抜いて樂を與へる利他の心、即ち慈悲心であり、

三 はこれらの智慧慈悲を以て自利々他の行を實踐する心、即ち方便心である。

かくの如き廣略止觀相順せる巧方便回向はまさしく還相菩薩の清淨願心を開示せるものと云はねばならぬ。

而してこゝに開かれた三心に就いて、智慧慈悲方便の三は般若を攝め、般若はまた方便を攝するが故に、この三心は畢竟般若と方便との二であるとし、又三種の菩提門相異の法を遠離するを無障心と名づけ、三種の順菩提門の法を満足するを妙樂勝眞心と呼び、そこに名と義の相攝を明したのが名義攝對である。蓋し般若と方便とは菩薩の父母と云はれ、智慧と方便に依らざれば菩薩の法は成就し得ぬのである。更に障菩提の法を遠離する無障心と順菩提の法を満足する妙樂勝眞心とは依て以て菩薩の清淨願心を示すものである。然るにこれらの四心は凡て菩薩の柔軟心より展開せるものなるが故に、還相の菩薩はこの四心を具足することに依て巧方便回向を成就するのである。それ故に願事成就には「菩薩智慧心方便心無障心勝眞心能生<sub>二</sub>清淨佛國土<sub>一</sub>」

と云つたのである。こゝに智慧心と云つたのは、智慧慈悲方便を分つ時の智慧心ではなくて、般若の根本智を指したものとされる。そして願事成就とは、願生の事業を所願の事と名づけ、自利々他圓滿を名づけて成就とすると、『顯深義記』の解釋であるが、この四心に依てよく善巧攝化を成就するのである。この四心に就いて『顯深義記』(五四九)には三義を擧げ

一 此土七地已還菩薩所得

二 法藏菩薩因中所修

三 彼土除其本願菩薩修此四心得平等法身證入一乘之士之義

と云つてゐる。『論註』の當相が勿論第三義にあること、そして今引用の意趣も一應そこにあることは云ふ迄もない。かくて菩薩はこの四種心を得るが故に、五種の法門に隨順して五種の功德力を成就し、能く清淨の佛土に生じて出沒自在を得るのである。出沒自在とは不動而至、至を出と名づけ、不動を沒と名づける。即ち身業禮拜已下五種の業和合すれば自利々他自在を得、無功用の行偏く十方に至て供佛利生の事業成就するのである。

かくて願事成就して自利圓滿するが故に、自ら利他の大用を起すと明すが利行満足章である。『論』に依れば、五念の行は次第の如く漸次に、近門・大會衆門・宅門・屋門・園林遊戲地門の五功德を成就する。而してその五功德門は前四種に於いて入の功德を成就し、第五門に於いて出の功德を成就するものである。出とは生死の園煩惱の林中に回入することであるとすれば、入とはまさしく寂靜涅槃の境地に歸入することである。生死を出づることは涅槃に入ることであり、生死に入ることとは涅槃を出づることである。從てこゝに入出と云へるものは特に涅槃を中心として説かれたものと理解せられる。それ故に入の四門は證大涅槃の極證をあらはし、それは淨土涅槃の徳を示すものである

が、この極證から出の第五門の徳をあらはして、生死の園煩惱の林中に神通遊戯するを得るのである。されば證大涅槃の極證は常に還相回向の背景として理解されねばならない。

それ故にこそ、宗祖は前四の功徳を釋しつゝ、出の功徳を説き來り、この出第五門を以て淨土の菩薩が還來穢國の利他活動を示すものとし、園林遊戯地門を還相回向の證明と見られたのである。既に宗祖は還相回向を明す最初に「淨土論曰」として出第五門の文を引かれた如く、それは今の『註』の文と照應しつゝ、その中間に引用せられた諸文は、凡て還相回向の菩薩が十方世界に出て、化他度生することを證せんが爲であつた。かくて淨土の菩薩は自利々他の行成就して、凡聖善惡の差別なく平等法身を證し、其の位は凡て一生補處である。そして一生補處に於いて還相の利他活動を見出されたことは、偏に第二十二願に基いてであるから、この願を必至補處之願、一生補處之願と呼ぶと共に、還相回向之願と名づけられたのである。

思ふに、眞實の衆生救濟は自ら眞如法性を證得すると共に、同時に衆生の姿に應同するものでなければならぬ。自らが救はれずして衆生を救ふことはできぬ。菩薩の自利々他成就が利他の大用を以て成就することを示された『論』の精神は、一切衆生と共に生死の苦惱を受けつゝ、然も自ら涅槃を究竟して、それに依て一切衆生を攝取し、共に佛道に向はしめんとする菩薩行をあらはすにある。まことに自利成就することに於いて、種々の應化身を示し衆生の姿に應同する菩薩こそは、衆生救濟の利他活動の理想を實現せるものであり、こゝに眞實の自利々他満足がある。

然るにかくの如き自利々他の満足は、われら衆生のよくなし得るところでなく、全く如來の清淨願心に依て成就せしめられるところであらねばならぬ。その義を示すものは、『論註』の他利々他の深義であり、その義意を明瞭に示されたのが宗祖の『二門偈』であつた。そして今、『論註』の當相に従て、還相回向の相狀を淨土の菩薩の徳相に就



いて明された宗祖は、それが眞實證の内徳として、全く他力回向であることを證明せんとせられたのである。それ故に利行満足章の文を以て、選相回向の明證とせられた宗祖は、前來の往還の證果を結んで

「爾者大聖眞言誠知、證<sub>ニ</sub>大涅槃<sub>一</sub>、藉<sub>ニ</sub>願力回向<sub>一</sub>、選相利益顯<sub>ニ</sub>利他正意<sub>一</sub>」

と云つて「證<sub>ニ</sub>大涅槃<sub>一</sub>、藉<sub>ニ</sub>願力回向<sub>一</sub>」といふのは往還の證果全く彌陀他力の利益と示す爲であるが、「選相利益顯<sub>ニ</sub>利他正意<sub>一</sub>」とまさしく、それが涅槃についた利他の大用なることを顯はされたのである。これ宗祖が教行信證の四法を往相回向の内容として、自行化他全く願力回向であるとせられる立場を示すものである。而して次に

「是以論主宣<sub>ニ</sub>布廣大無碍一心<sub>一</sub>、普偏開<sub>ニ</sub>化雜染堪忍群萌<sub>一</sub>、宗師顯<sub>ニ</sub>示大悲往還回向<sub>一</sub>、弘<sub>ニ</sub>宣他利々他深義<sub>一</sub>、仰可<sub>ニ</sub>奉持<sub>一</sub>、特可<sub>ニ</sub>頂戴<sub>一</sub>矣」

といはれたのは、他力回向の義がもとは『論』『論註』にあり、一心の因に依て往還の利益を得るは全く願力回向に依ることを示し給うたのである。

かくて我々は今更に如來の願力の廣大なることを思はずにはゐられない。何故ならば、往相の回向が如來の願力回向に依ることは勿論であるが、その願力に依て大般涅槃を證する時、そこに大涅槃の利益として、選相の力用は必然的に發動する。然もかゝる利益をあらはすところにこそ、如來願力の利他の正意が存するからである。されば如來の回向は常にその願心の上に往還の二相を含み、この二相に依て信心が發起するのである。それ故に二種の回向といつても、それはたゞ眞實信心に於いて領受せられ、眞實の信心は廣大無碍の一心なるが故に、よく如來二種の回向を心證するのである。『和讃』に

「彌陀の回向成就して、往相選相ふたつなり、これらの回向によりてこそ、心行ともにえしむなれ」

「南無阿彌陀佛の回向の、恩徳廣大不思議にて、往相回向の利益には、還相回向に回入せり」  
等とあるは、全くこの意味を示せるものである。

さきに還相回向を明すについて廣略要の過程のあることを注意したが、今それを想起することに依て、二十二願還相回向の願の深義は、『論』『論註』に依て明かにせられたことをよく領解することができ、そこに願文を擧げられなかつた意味も理解し得るであらう。そしてこの「證卷」後半の文こそは、まさしく還相回向の直接的表現といふことができるのである。

(四) 眞佛土卷の根源的表現

「證卷」に次いで「眞佛土卷」の置かれた關係について、『六要鈔』（會本七右）には

「上來四卷約能歸機、自教至證然後宜知所歸身土是故能所有由四五成其次第」

と云つてゐる。又『同』一九には

「證中廣攝眞化佛土乃至於證雖有往生成佛分證究竟遠近差別、先以往生爲其近果是則證也、然往生後所見身土依解行雖有眞化總攝證中」

といふ解釋を見出すことができる。

思ふに『六要』の前義は、前四卷と此の卷とを相對してその關係を示したものであり、後義は「證」と「眞」「化」兩卷とを相對せしめて、「眞」「化」兩卷の地位を明かにせるものである。こゝに「眞佛土卷」に對する二の見方が成立する。

前義に於いて能歸の機に對して所歸の身土を明すといふ能歸所歸の言は、『執持鈔』十二に

左に

「この能歸の心所歸の佛智に相應するとき」

とある能歸所歸と同じく、それは安心に約する言であつて、生佛の相對を以て顯はせるものである。而して安心の立場は、行信機法を相對せしめることは勿論であるけれども、その法とは大行の體南無阿彌陀佛であり、それは機の側から云へば所歸の體であらねばならぬ。それ故に教行信證の四法は全く衆生往生の因果を示すのであつて、佛土そのものに拘るのではない。従て四法（四卷）總じて能歸の機に約すと云はれるのである。これに對し「眞佛土卷」は所歸の佛土を顯すが故に所歸の身土を明すといふのである。因に所歸能歸の言に就いて、それを歸入の意に解し、歸命と區別する人もあり、又所歸所入を同一と見る先輩もあるが、よしその義は異るとしても、所歸命の眞身の外に所歸入の身土があるのではなく、土は身の所居であるから、同一と見て差支ないと思ふ。

この立場から「眞佛土卷」を見ると、**「眞佛土卷」**は却て『教行信證』に示される眞宗法門の根本となるのである。何となれば教行信證の四法はひとへに衆生往生の因果を示すものであるが、この往生の因果はまた如來回向の内容として、正覺の果徳から出づるものだからである。この意味をよく示すのは『淨土和讃』であつて、かの「讚阿彌陀佛偈和讃」は「彌陀成佛のこのかたは」に始つて、それは所歸の身と共に、所居の土を讚詠したものであつて、眞佛土に相當する。而して次の「三經和讃」は衆生往生の因果を示して前四卷に相當すると見ることができである。従て前者は正覺の果體を示し、後者は衆生往生の因果を明して、體用の關係をなし、體を全うして用を起し、用の所成はたゞ正覺の果體に歸する。即ち必至滅度は往生の果であると共に如來の自證として光壽二無量でもある。されば眞佛土は往還二回向の由出する根本であると共に、能歸の機の所歸處でなければならぬ。

次に『六要』の後義は、「往生後所見身土」とあるから、それは「證卷」に明す難思議往生人の見る所の佛身佛土

でなければならぬ。かくて「證卷」に對する「眞佛土卷」は、難思議往生の人が往生して後に見る身土であるから、「眞佛土卷」はまさしく「證卷」から開出せられたものである。即ち「證卷」の標擧には

「必至滅度之願、難思議往生」

とあるその難思議往生から開いたので、「眞佛土卷」の終には

「又云難思議往生是也」

と云つて、「證卷」標擧の難思議往生に對應せしめられてゐる。されば前四卷には夫々淨土眞實教、淨土眞實行等と眞實の語が冠せられてゐるに對し、こゝでは眞實佛土と云はずしてたゞ眞佛土と云つて、實を略してゐる。これ全く眞實證から開出せられた眞佛土なるが故に實の字を略すると共に、下の化身土に對して眞佛土と顯はされたのである。

かくの如く眞佛土は眞實證から開出せられ、又證の中に攝るといふ兩者の關係は、眞佛土に還相回向の根源を見出さんとする今の所論に重要な意味を持つてゐる。これを『大經』と比較するに、『大經』にあつては上卷に如來淨土の因果を説き、下卷に衆生往生の因果が説かれてゐて、所化の衆生の救はれる因果は、能化の佛の因果たる果の中から開出せられてゐる。之に對し『教行信證』はその順序が逆であつて、「教」「行」「信」「證」の四卷は衆生往生の因果を説き、この「眞佛土卷」は却て如來淨土の因果に相當する、そして如來淨土の因果たる佛身佛土が衆生往生の因果の證果から開出されるといふ態勢をなしてゐる。それは何故であるかと云へば、「眞佛土卷」は佛身佛土を顯はさんが爲ではなくて、却て衆生往生の證果が彌陀と同一の證果なることを明かにせんが爲である。そしてそれに依て、「阿彌陀如來從如來生示現報應化種々身」とあるが如く、涅槃の極證が靜的な究竟地であると共に動的な無窮の佛道

として一切衆生を佛道に向はしむる還相利他の大用なることをあらはさんとせられたのである。されば「證卷」より開かれた眞佛土に就いて古來二義あることが注意せられてゐる。

一「眞佛土卷」にあらはされる眞佛土は、涅槃の眞因たる信心を得て、「願土にいたればすみやかに、無上涅槃を證して」拜むところのもので、佛は即ち不可思議光如來、土は無量光明土である。従てこの場合の佛土は彌陀に就いてあらはしたのであつて、二十三の二願は彌陀の覺體を示すものである。

二然るに眞實證は必至滅度である。而してその滅度という場合の滅は迷の因たる無明の滅であり、度は生死を滅して涅槃に至る到彼岸の意味である。故に滅は無明を滅するが故に光明無量であり、度は不生不滅の涅槃に到れることであるから、壽命無量である。従て滅度を開けば光明無量壽命無量であつて、「證卷」に明す滅度を開いて「眞佛土卷」に光明壽命の誓願とせられたのである。『末燈鈔』<sup>三一</sup>右に

「滅度をさとらしむと候は、このたびこの身のおはり候はんととき、眞實信心の行者の心報土にいたり候ひなば壽命無量を體として、光明無量の徳用はなれたまはされば、如來の心光に一味なり、このゆへに大信心は佛性なり佛性すなはち如來なりとおほせられて候やらん、これは十一二三の御ちかひとこゝろえられ候」

とあるのは、文は慶信の上狀であるけれども、宗祖が加筆して返されたものであるのみか、「たづねおほせられ候事かへすゝめでたく候」と仰せられてゐるから、これを宗祖の言葉と領解して差支ない。されば、二十三の二願を衆生の證果に就いて言ふことは、かくの如く宗祖の上に證權があり、又『大經』には眷屬長壽之願があり、異譯に眷屬光明之願がある。又『小經』には壽命無量を彌陀と衆生に就けて、

「彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫故名阿彌陀」

と云つてをるに於いてをやである。かくの如く「眞佛土卷」は「證卷」より開出せられたことは明かと云はねばならぬ。従て『六要』の第一義が能歸の機に對し、所歸の身土を明すと見る場合にも、それは特に前四卷との關聯に於いて見たのであるから、必ずしも、後義を遮するものではないであらう。かくて如來淨土の因果の中にこそ、衆生往生の因果がその根源を持つのであつて、その意味に於いて衆生往生の果に具する還相回向の根源は、溯つては眞佛土に基くと云はねばならぬ。そしてこゝに注意せられるのが、「證卷」の

「然者阿彌陀如來從<sub>レ</sub>如來生示<sub>ニ</sub>現報應化種々身<sub>一</sub>也」  
とある文である。

この文の根據が『大經』下卷、衆生往生の果を説く中、特に淨土の菩薩の利他の徳を嘆じて、

「從<sub>レ</sub>如來生<sub>ニ</sub>法如々<sub>一</sub>」

とあるに基くことは先に述べた。而して今は阿彌陀如來とあるから、菩薩の徳ではなくて彌陀の徳を嘆ずる文であることは云ふまでもない。又「示現報應化種々身」の文は『論註』に出第五門即ち園林遊戯地門を明す文に依り給うたもので、それは既に述べた如く還相菩薩の徳を嘆ずるものである。この文に於いて宗祖は何をあらはさうとされたのであらうか。蓋し減度の轉釋を終つて突然、阿彌陀如來と佛身を示す言が置かれた意趣は一見奇異にさへ感ぜられ、そこに古來いろ／＼の義が立てられた。住田智見師の『六要鈔私纂』<sup>①</sup>によれば文意に兩重あることが注意せられてゐる。

第一は文意に従ふ解釋であつて、上來減度を轉釋して眞如一如に歸した。それは、淨土の證果が眞如法性を證りあらはした證果であることを攝末歸本して示し、それに對して從本垂末して一如法性より形をあらはして報應化種々の身を示せるが阿彌陀如來であると示したのである。『一念多念文意』<sup>(二〇)</sup>に

「一實眞如とまうすは無上涅槃なり、涅槃すなはち法性なり、法性すなはち如来なり乃至この一如寶海よりかちをあらはして法藏菩薩となりのりたまひて、無碍のちかひをこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに報身如来とまうすなり」

とあるのはさきの意味であり、『唯信鈔文意』<sup>一八</sup>も同一意味を示したものである。従て従如来生は法性法身より顯はれた佛であり、報は方便法身、應化は十方法界出現の佛である。

第二には義意に従つて解釋するのであつて、既に阿彌陀如来とあるから、當相は勿論彌陀であるけれども、それが「眞佛土卷」でなく「證卷」に示されたことは、衆生往生の果を彌陀の妙果に同ずる意があるのである。それ故にこそ、「従如来生」の文は直ちに二種法身を明す文に依らず、『大經』の淨土の菩薩の利他の徳を示す文に依り、又『論註』出第五門の釋に依て造語せられたので、彌陀の妙果も無上涅槃、衆生所得の果もまた無上涅槃であつて、そこに自ら報應化種々身を示現して、普賢大悲の行を具する妙果なることを示して、遙かに還相回向の釋に應ぜられたのである。

宗祖は既に眞實證を顯はして、利他圓滿之妙位、無上涅槃之極果と嘆ぜられたのであるが、それは『法事讚』<sup>(二八)</sup>に

「彌陀如来號曰無上涅槃」

とある文に對應して、眞實行信の因に依て得る眞實の證果が彌陀の妙果と異なるものではないことを示してゐる。然れば煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌が往相回向の心行を獲る時、正定聚に住し、正定聚に住するが故に必ず滅度を得るのである。さればその滅度を一如に歸して、その一如より來生せる彌陀であることを示されたのである。

この文に依て知らるゝことは、教行信證の四法に依て示された衆生往生の因果、凡て他力回向であることは勿論で

あるが、然もその證果は無上涅槃の極果であると共に、彌陀の證果と別なるものではないといふことである。從て、彌陀如來從如來生して、報應化種々の身を示現せらるゝが如く、無上涅槃の極果を得る淨土の菩薩も自ら報應化種々の身を示現して、還相利他の大用を持たずにはゐないはずである。それ故に、往生の後に見る身土こそは、還相回向の發動する根源であると云はねばならない。この意味に於いて「眞佛土卷」を還相回向の根源的表現とするひとつの觀點が許されるのではないであらうか。こゝに我々は「眞佛土卷」に就いて、その意味を確かめねばならない。

思ふに還相回向が「證卷」の中で明されるのは、眞實の證果が二利圓滿の證果であり、その證果は眞實行信の因に依て得るものであるから、因果門から云へば、還相回向が二利圓滿の妙果を顯す「證卷」に明されるのは當然と云はねばならない。然るに二利を分別する時は還相は往相證果と分たれるべきであつて、その二利相對する立場は淨土眞宗を往還二種の回向を以て示す總標の文にあらはれ、それが『教行信證』全體のひとつの文脈をなすことは明かと云はねばならぬ。從てその立場に於いて、「證卷」から開出せられた「眞」「化」二卷の上に、還相回向の義意を見出すことは、寧ろ當然と云はねばならない。

之に依て「眞佛土卷」を伺ふに、まづ光明無量之願、壽命無量之願を標擧して、光壽無量が眞報身の覺體なることを示すと共に、それが實に大悲誓願の成就なることがあらはされてゐる。それ故に

「謹按眞佛土者佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也、然則酬報大悲誓願故曰眞報佛土、既而有願即光明壽命之願是也」

と佛は不可思議光如來、土は無量光明土と示された。こゝに不可思議光如來とあるのは「行卷」に大行を釋して、「大行者則稱無碍光如來名」とある無碍光如來と共に、常に宗祖の用ひられる佛名である。そして宗祖は恐らくは、



この佛名を通して常に大悲の願心を仰がれたのである。即ちかの大行釋にしても、稱無碍光如來名と云つて、稱南無阿彌陀佛と云はれなかつたのは、無碍光が破闇滿願、即ち攝取不捨の徳を示し、かくの如き徳を持つ如來の名なることを示して稱無碍光如來名といつたのである。されば無碍光は如來の願心成就を示すのであり、従てその願心を領受して稱へるところに、大行を成ずるのである。かくの如く無碍光如來といひ、不可思議光如來といふは、かくの如き如來の願心成就を示すのであつて、『唯信鈔文意』<sup>二</sup>右には

「如來とまふすは無碍光如來なり、尊號といふは南無阿彌陀佛なり、乃至 如來の尊號は不可稱不可說不可思議にましますゆへに、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御名なり」

とあるのは、よくこの意味を示すものである。それ故に無碍光も不可思議光もそれが表詮遮詮の別はあつても、如來の別徳として破闇滿願攝取不捨の徳を示すものであり、かくの如き願心の成就こそ、還相大悲の根源をなすものといふことができる。

更に「土者亦是無量光明土也」とあらはされた無量光明土を通して、その土が菩薩の正修行の行はるゝ法性隨順の土として、此の報土に至れば十方世界に現はれて、自在に供佛度生することをあらはさんとせられたのである。されば無量光明土はその土徳として、破闇滿願大悲還相の根源であることが見られないであらうか。

然もこれらの眞佛土は大悲の誓願に酬報するが故に報佛土であると云はれる。蓋し光壽無量の覺體は別願酬報の眞報身であると共に、その別願を成ぜしめる所以のものは、隨順法性の法性法身だからである。従て光壽無量を以て佛土をあらはすのは、佛土の高妙を誇る爲ではなくて、『正像末和讚』に

「超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して

光明壽明の誓願を、大悲の本としたまへり」

とある如く、佛土凡て如來大悲の所成であることを示さんが爲である。かくの如き大悲願心こそ、眞の佛土を成就し、それ故に往生即成佛せしめて、大悲選相の利益を恵み給ふ根源となるのである。

かくの如き眞佛土の意義を明かにする爲に宗祖は、二十三の二願文已下、『涅槃經』に就いて十三文、曇鸞の釋文七文、善導の釋文四文等を引用してゐる。これらの引用は、何れも報身報土の姿を示すものに外ならない。さればこそ、これらの經論の引用を終つて、

「爾者如來眞說宗師釋義明知顯<sub>ニ</sub>安養淨利眞報土<sub>ニ</sub>、惑染衆生於<sub>レ</sub>此不能<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>性所<sub>レ</sub>覆<sub>ニ</sub>煩惱<sub>ニ</sub>故」

といつてゐられるので、その一々に就いて文義を研討するならば、いろ／＼のことがあるけれども、要は眞の報佛土を顯はさんとするにある。例へば『涅槃經』では

「若爲<sub>ニ</sub>衆生<sub>ニ</sub>不爲<sub>ニ</sub>利養<sub>ニ</sub>當<sub>レ</sub>知是則爲<sub>ニ</sub>如來<sub>ニ</sub>」

と云つて彌陀報身の内徳を示し、又『論註』六文は報佛土をあらはすものであるが、清淨功德、性功德、大義門功德、不可思議力等の釋を通してそれが彌陀報身の自利々他圓滿の徳を示すものとして自利々他の釋を引き、かくの如き功德の本を如來の本願力住持に歸して、眞報土には自ら還相利他の徳を持つことを説いてゐる。更に善導の釋文にあつても、最後に「彌陀妙果號曰<sub>ニ</sub>無上涅槃<sub>ニ</sub>」の『法事讚』の文を引き、眞實證としての無上涅槃が彌陀の妙果に異らぬことを示してゐるが如き、何れも還相利他の大用の根源を明せるものでないものはない。いまその一々に就いて論及する暇はないけれども、それはたゞ安養淨利の眞報土たることを示すものと云ふことができ、隨順法性の如來の回向成就し給へる眞實の行信を得れば、必ず無上涅槃の妙果を得て、直ちに法性常樂を得ることができる。そしてこ

の法性常樂の無上涅槃こそが還相利他の根源たるのである。故に「眞佛土卷」こそは、還相回向の根源的表現と見て差支ないと思ふ。

① 『教行信證之研究』住田智見著、六二七頁。

#### (ハ) 化身土卷の具體的表現

凡そ宗祖が還相回向の徳を嘆ぜられる場合二の領解が見られる。即ち

一は眞實行信の因に依て得る眞實證の妙用として行者自ら彼土に於いて得る利益とするのである。従て眞實證の中で還相回向が明さることとなる。然しそれは往相證果に伴ふ必然的力用であるから、信樂の一念に往還二種の利益を得るのであつて、「極樂は樂しむと聞いて」參る世界でないことが明かにせられるのである。

二には還相の利益が彼土の利益であるから、それは淨土の聖衆、例へば觀音勢至等が彌陀の大悲に依て還相利他の大用をあらはし、それを今我々が受用して、これらの普賢大士の徳に依て獲信したことに感銘するのである。「勢至和讃」に

「念佛のひとを攝取して、淨土に歸せしむるなり、

大勢至菩薩の、大恩ふかく報ずべし」

と云ひ、また「太子和讃」に

「救世觀音大菩薩、

聖德皇と示現して、

多々のごとくすてずして、

阿摩のごとくにそひたまふ」

等とあるのはその意味である。而してこの場合、宗祖にとつて勢至菩薩は「源空聖人御本地也」と記され、救世觀音大菩薩は聖德皇と示現して、「佛智不思議の誓願に、すゝめいれしめたま」うたのであるから、還相回向の大用は觀念ではなくて、具體的事實でなければならぬ。従て我らの獲信の感激の中には、かうした還相の大用が生々と感ぜられるはずであつて、こゝに宗祖が、總序に

「然淨邦緣熟調達闍世興<sub>ニ</sub>逆害<sub>ニ</sub>淨業機彰釋迦韋提選<sub>ニ</sub>安養<sub>ニ</sub>斯乃權化仁齊救<sub>ニ</sub>濟苦惱群萌<sub>ニ</sub>世雄悲正欲<sub>レ</sub>惠<sub>ニ</sub>逆誘闍提<sub>ニ</sub>」  
と喜び、王舍城の悲劇にあらはれた人々を凡て權化仁と仰がれた意味がある。

「彌陀釋迦方便して、阿難目連富樓那韋提

達多闍王頻婆娑羅、耆婆月光行雨等

大聖おの／＼もろともに、凡愚底下のつみびとを

逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり」

といふ和讃は、最もよくこの意味を示したものであり、そこに彌陀釋迦の方便があつたのである。こゝに「彌陀釋迦方便して」とあるのは勿論善巧方便の意味であつて、それは還相回向の德よりあらはれたこれらの聖衆であることを嘆ぜられたものである。蓋し

「然娑婆化主因<sub>ニ</sub>其請<sub>ニ</sub>故即廣開<sub>ニ</sub>淨土之要門<sub>ニ</sub>、安樂能人顯<sub>ニ</sub>彰別意之弘願<sub>ニ</sub>」

といはれるところに、二尊一致の大悲善巧があるのであるが、これから推求するとき、要門・眞門の二門は結局弘願に轉入せしめる爲の大悲攝化の力用であり、そこに報應化種々の身を示現して、我等を弘願眞實の一法に引入し給

ふ大悲還相の具體的表現を見ることが出来る。既に還相の利他活動が如來大悲の回向に基くやうに、要眞二門も大悲攝化の悲用には違ひないのであつて、さうした悲用の具體的表現として還相回向の姿を拜むことは、當然許されていゝのではなからうか。こゝに「化身土卷」に就いて、その意味を確めてみたいと思ふ。

凡そ『教行信證』六卷が眞假批判の態勢の上に成立してゐることは云ふまでもない。然しまた内題に「顯淨土眞實教行證文類」とある如く、それは淨土眞實を顯彰する書である。それ故に前五卷の各々に顯淨土眞實教文類等とある如く顯淨土眞實の語が冠せられ、第六卷のみ顯淨土方便の語が置かれてゐるけれども、それはたゞ顯眞實の爲の顯方便であつて、他意あるわけではない。そしてこの眞實をあらはすものが淨土眞宗であるから、まづ本書の大綱を明して、

「謹按淨土眞宗有二種回向、一者往相、二者還相」

とあらはされたのである。蓋し淨土眞宗は往還二種の回向の外にはないのであつて、この往還二種の回向に依て淨土眞實が顯彰せられる。然もこの如來回向は淨土眞實の絶對的開顯であるから、回向には方便の回向はあり得ない。それはたゞ南無阿彌陀佛の回向に依て、往相回向の利益には還相回向に回入するのである。そしてこの往相回向の内容をなすものが眞實の教行信證である。從て眞實の四法はまた淨土眞實の絶對的開顯である。この立場に立つ時、眞實證から還相回向の悲用が擴充せられて、「眞」「化」兩卷に及んだと見ることは、この兩卷が「證卷」から開出せられたといふ意味と相望して、必ずしも無理ではないはずである。それ故に還相回向の根源が「眞佛土卷」に見出されると思へば、その「眞佛土卷」から引き出された化身土は、それに依て眞の報佛土を明かにせんが爲であり、還相回向の本源を愈々具體的ならしめんが爲である。

それ故に宗祖は、「眞佛土卷」では、

「假之佛土在<sub>レ</sub>下應<sub>レ</sub>知」

と眞佛土化身土を對應せしめる立場から、たゞ化の佛土を顯すものが「化身土卷」であるかの如く示されたけれども、それは眞假の得失が佛土に就いて最も明瞭にあらはされ、それに依て淨土眞實の絶對的開顯が果されるからである。

然し、「化身土卷」では、化の佛土の因たる假の四法に説き及び、こゝに眞實の教行信證が方便の教行信證と對應するのである。かくて「化卷」から逆觀する時、『教行信證』は眞假相對する批判の立場に立ち、眞實が方便を批判し、純化することに依て、愈々眞實が顯彰せられることゝなつたのである。されば『教行信證』を如來回向の絶對的開顯の立場から見れば、「化卷」はそれが方便として簡別せられつゝ、却て眞實中の方便として、如來の大悲攝化の眞實を示すことゝなる。逆に眞假相對して、眞實に依て方便を批判する立場に立てば、眞假の相對門として、淨土眞宗の教相判釋を示すことゝなる。前者は二回向門自利々他門であり、後者は因果門である。然もこの二の理解は相反するものではなく、相依相成して因果門に依て二回向門の意味が愈々明かにせられ、二回向門に依て因果門が生かされ、そこに假は却て眞に入らしむるものとして、從假入眞が絶對眞實開顯の立場に攝取せられ、從假入眞の立場こそ却て還相回向の具體的表現と見ることができるのである。

何となれば、宗祖が假として批判の對象とせられたのは、

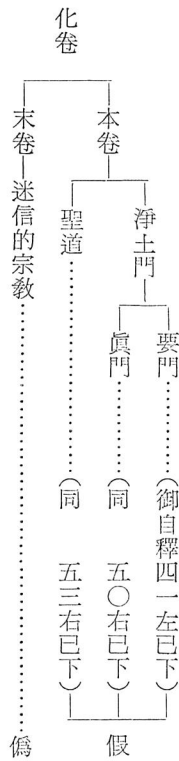
一淨土門内に於ける定散之機 (要弘對)

二佛教内に於ける聖道自力の教 (聖淨對)

三一般世俗の迷信的宗教 (内外對)

の三に分つことができるのであるが、それらに對する宗祖の批判は冷い批判ではなくて、かうした段階すら弘願轉入への大悲攝化のはたらきとして仰がれたのである。

もと眞假の對立は既に「化卷」が淨土方便といはれることに基き、眞實の行信に對し方便の行信が、又眞佛弟子に假と偽の佛弟子が對立して、假とは聖道諸機淨土定散機、偽とは六十二見九十五種之邪道として、それが「化卷」では、



といふ態で示されてゐる。この中、宗祖が最も重要視されたのは淨土門内の眞假批判であつて、既に後序の文に見える如く、當時の道俗が内外邪正聖淨眞假を辨へざるを慨かると共に、よき人法然聖人の正意がやゝもすれば没せんとするに對し、『選擇集』の眞意を開顯せんとする所に本書撰述の意趣があつたからである。それ故に要眞弘の三門が分別せられ、弘願眞實の立場から、淨土の要門や眞門の迷行惑信の徒に對し、嚴しい批判を加へられると共に、彼等をよく弘願眞實に引入し、かうした要眞二門の上にも限りなき大悲攝化の意趣を仰がれたのである。従て相對の立場にあつては、眞假が相對的に批判せられ、それに依て外邪異執が徹底的に追究せられたけれども、それは飽くまで絶對的眞實を顯はさんが爲であつた。そして機趣の趣入といふ實踐的立場から、方便は眞實への前段階として、相對から絶對への轉回が祖聖自らの三願轉入を中軸として注意せられたことも當然である。然し、その方便はまた眞實の中に攝められるべきもので、方便は眞實に依て否定せられつゝ、その否定を通して眞實を明かにしてゐるのである。

それ故に方便は却て眞實の中で、否定的に眞實に貢獻し、眞實のない所に方便はない。かうした眞實を絶対的に開顯するものが『教行信證』であり、往還の二回向を綱要とする淨土眞宗である。かうした立場に於いて、我々は「化卷」が、大悲攝化の波瀾として、又それが「眞佛土卷」から開出せられた點から見て、還相回向の具體的表現と見ることを主張したのである。

思ふに「眞佛土卷」に次いで「化身土卷」が開かれるのは、既に願海に眞假の差別があり、従て佛土にも眞假の別があるからである。それ故に「眞佛土卷」の終には、

「然就願海有眞有假、是以復就佛土有眞有假 乃至 既以眞假皆是酬報大悲願海、故知報佛土也、良假佛土業因千差土復應千差、是名方便化身化土」といつてゐる。

かくの如く願海の眞假から佛土の眞假が分れるのであるから、「化卷」にはまづ

至心發願之願 邪定聚機 雙樹林下往生

無量壽佛觀經之意也

至心回向之願 不定聚機 難思往生 阿彌陀經之意也

と標舉せられた。こゝに十九二十の二願名を標舉せられたのは、「信卷」に「至心信樂之願 正定聚之機」と第十八願名を標舉せられたのに對するもので、そこに眞假の別が示されたのである。蓋しそれは能修の機に自力諸善の機、自力稱名の機あることを示して、これらの機をも誘引せんとの二尊の大悲なることを顯し給うたのである。『末燈鈔』九右に

「佛恩のふかきことは懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御ちかひのなかに第十九第二十の願の御あはれみにてこそ、不思議のたのしみにあふことにてさふらへ」



とあるのは、その意味である。かくて眞假三願を軸として所謂三々の法門が成立し、それが『教行信證』を始め、『和讃』『三經往生文類』等に示される一宗の綱格をなしたのである。

至心信樂之願——正定聚機——難思議往生——大經之意——前五卷

至心發願之願——邪定聚機——雙樹林下往生——觀經之意——

化卷

至心回向之願——不定聚機——難思往生——小經之意——

この三々の法門は實に宗祖が三願轉入の體験を基調として示された本願觀であり、從て「化卷」はこの二願の願意を明かすより外ないと云つて差支ない。

されば、「眞佛土卷」に對應して、まづ

「謹顯<sup>ニ</sup>化身土<sup>ニ</sup>者佛者如<sup>ニ</sup>無量壽佛觀經說<sup>ニ</sup>眞身觀佛是也、土者觀經淨土是也、復如<sup>ニ</sup>菩薩處胎經等說<sup>ニ</sup>即懈慢界是也、亦如<sup>ニ</sup>大無量壽經說<sup>ニ</sup>即疑城胎宮是也」

と云つて、化の身土が示された。然し「化身土卷」はたゞ化の身土を明すのみではない。「眞佛土卷」から開かれたからこそ「化身土卷」と云はれるけれども、廣くは前五卷にあらはされた眞實の願海に對し、方便の願海が示されてゐるのである。然も要眞二門の方便の願海を示すばかりでなく、「眞の言は假に對し、僞に對す」と云はれる如く、聖淨相對の眞假、内外二道の眞僞をも決せられてゐる。それは勿論二門二道の眞假眞僞を辨別して、彼を捨て、此に歸せしめんが爲の施設であると共に、かくの如き假僞に屬する一切の法門すら、全く他力の佛願に歸せしめん爲の誘引方便なのである。即ち聖道門と云はるゝものも、又廣く外道と云はるゝものも、外道を捨て、内道に歸し、聖道を捨て、淨土に入らしめんが爲に、或は仁義五常の道を教へ、自力の諸善を説いて、弘願の機を調熟せられたのであ

る。例へば『大集經』に八重の眞寶を説いて、如來緣覺已下無戒名字比丘までを眞寶と云つてゐるのは、この意味を示せるものである。然るに當時の道俗はかくの如き聖道、外道に昵んで佛願眞實に歸することを知らないが故に、宗祖はそれらを辨別して速かに佛願眞實に歸すべきことを教へられたのである。従て宗祖の意中を推するに、本願眞實の絶對的開顯の立場にあつては、これら聖道外道淨土の要眞二門も大悲攝化の大用であり、従てこれらの諸門を説ける人師も凡て還相回向の菩薩として、その悲用を仰がれたのではないであらうか。こゝに宗祖が『觀經』の意を開顯するに就いて、

「然濁世群萌穢惡含識乃出ニ九十五種之邪道、雖入ニ半滿權實之法門、眞者甚以難實者甚以希、僞者甚以多虛者甚以滋」

と歎き

「是以釋迦牟尼佛顯ニ說福德藏・誘ニ引群生海、阿彌陀如來本發ニ誓願・普化ニ諸有海、既而有ニ悲願」  
といつて、十九願の意を開顯せられた意趣がよく領かれるのである。

かくて「化身土卷」の内容を逆觀すれば、まづ内外二道を批判して外道を捨て、佛教に就かしめ、その佛教門内にあつてまた聖淨二門を批判して、難證の聖道を捨て、易修の淨土を勧め、更にその淨土門にあつて、要眞弘の三門を分別し、十九二十の方便を捨て、十八願の弘願眞實に入らしめんとせられたのである。かくの如き從假入眞の過程は、恐らくは宗祖が時代の教學を批判して、誓願一佛乘の大道を明かにせずにあられなかつたからであらうが、それと共に眼を内に轉じてみれば、かうした迷信邪教に迷はされて卜占祭祀を事とするものゝ多い中にあつて、外儀は佛教徒でありながら内心外道に歸敬し、或は聖道の教學に縛られて時機の自覺を缺く人師の中にあつて、更には選擇本

願の念佛に遭ひながら定散の自心に迷へる人の多い中にあつて、今弘願眞實の念佛に遇ひ得た自身を見出された宗祖が、如何に如來恩徳の深さに感泣せられたであらうか。そしてその感激の眼を以てする批判は、かうした外教・聖道、要眞二門の中に大悲攝化の悲用を見出し、そこに還相回向の具體的表現を拜まれたのではなかつたであらうか。勿論その根源は如來の願海に基くことは勿論であるけれども、阿彌陀如來報應化種々の身を示現して、一切衆生を攝化し給うが如く、淨土の菩薩もまた、その自在の所化衆生の爲の故に、弘誓の鑑を被て恒沙無量の衆生を開化せられたのであるから、阿彌陀如來が、「この報身より應化等の無量無數の身をあらはして微塵世界に無碍の智慧光をはなしたしめたまふ」やうに、淨土の菩薩もまた隨類無碍のはたらきを以てわれらを弘願眞實に導き給ふに違ひない。然れば、外教聖道要眞二門はかうした佛菩薩の智慧光として仰がれ、そこに限りなくわれらを大悲攝化し給ふ還相の姿を拜むことができる。

かくて宗祖は

「是以釋迦牟尼佛顯說福德藏・誘引群生海、阿彌陀如來本發誓願・普化諸有海。」

といつて、釋尊が定散諸機を誘引せんが爲に十九願修諸功德の願意に依て、定散三福諸善の福德藏を『觀經』の上に開説せられた意趣を明かにせられた。蓋し釋尊のかうした方便はもと彌陀の十九願意に發し、諸有衆生を救はんと大悲に基くのであるから、「觀經和讃」には

「臨終現前の願により、釋迦は諸善をことごとく

觀經一部にあらはして、定散諸機をすゝめけり

諸善萬行ことごとく 至心發願せるゆへに

往生淨土の方便の

善とならぬはなかりけり」

とその意趣を明かにせられた。

かくて「化身土卷」では、十九願文を列ね、更に化土の證文を經釋に互つて出した後

「爾者夫按楞嚴和尚解義念佛證據門中、第十八願者顯開別願中之別願、觀經定散諸機者勸勵極重惡人唯稱彌陀也、濁世道俗善自思量已能也應知」

と結んで、『觀經』に諸善を説くは方便であつて、それに依て唯稱彌陀と本願の正意を顯したものであると、その方便の意味を明かにせられた。そして更に『觀經』の説意を明かにする爲に有名な隱顯釋義を置いて、『觀經』が顯説には定散二善を説いて自力の信を勤めるのであるけれども、隱には他力の信に基いて弘願の念佛を説き、そこに從假入眞の深意が説かれてゐることを明かにせられた。それは勿論釋迦の方便であり、そこに『觀經』の意趣があるけれども、この『觀經』に代表せられる韋提希を始めとしてその會座にあらはれる人々は、既に宗祖が權化仁と讃えられたやうに、還相の菩薩であつて、かうした釋迦の方便の中にこそ還相回向の具體的な表現がなされたのである。そしてこの隱顯釋の下、善導・曇鸞・道綽の釋十七文を引いてその義相を明かにせられた。これらは何れも顯説の要門が隱彰弘願の爲の方便であることを證せんが爲であつて、それは善導の釋文が最初に出されてゐることにも見ることが出来る。次に私釋を出して、

「然今據大本・超發眞實方便之願、亦觀經顯彰方便眞實之教、小本唯開眞門、無方便之善、是以三經眞實選擇本願爲宗也、復三經方便即是修諸善本爲要也」

と云ひ、こゝに『三經』の宗要を對照することに依て、『觀經』の深意を明かにし、隱顯釋の立場を更に明確にせ

られた。こゝで『大經』は彌陀が眞實方便の願を超發すると云ひ、之に對し釋迦は方便眞實の教を顯彰すと云つて、眞實方便と方便眞實、願と教とを對照せしめて、二經の立場を明かにし、『小經』は眞門念佛を開示すると云つて、その特質を明かにせられた。蓋し『小經』は准知隱顯の説にも省られる如く、飽くまで『觀經』を受けたものであつて、『化卷』に於ける重點は眞假の對立として、要弘相對の上に見られるのである。かくて淨土の『三經』は顯にはそれ／＼の差別があるけれども、その宗要とするところは選擇本願の念佛であり、『觀經』顯説の自力作善、『小經』顯説の自力稱名と共に自力の信に基く方便に外ならない。かうした立場から更に『觀經』を解説して、

「依<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>按<sub>レ</sub>方便之願<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>假有<sub>レ</sub>眞、亦有<sub>レ</sub>行有<sub>レ</sub>信、願者即是臨終現前之願也、行者即是修諸功德之善也、信者即是至心發願欲生之心也、依<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>願之行信<sub>ニ</sub>顯<sub>ニ</sub>開淨土之要門方便權假、從<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>要門<sub>ニ</sub>出<sub>レ</sub>正助雜三行<sub>ニ</sub>」

といひ、方便は眞實を離れてあるのではなく、方便の中に眞實が、即ち要門の中に弘願眞實が豫想されてゐるので、それは先に擧げた「觀經和讚」と同じ意味を示してゐる。そして方便の願の行信から淨土要門の方便權假が開かれるので、善導はそれを正行、助業、雜行と開いて要門の行體を示したことをあらはし、更に要門の内容を別釋して、二修二機と二種の三心と往生を列擧して判釋を加へ、更に

「亦此經有<sub>レ</sub>眞實<sub>ニ</sub>斯乃開<sub>レ</sub>金剛眞心<sub>ニ</sub>欲<sub>レ</sub>顯<sub>ニ</sub>攝取不捨<sub>ニ</sub>」

と此經にも眞實の救済のあることをあらはして、隱彰の實義を示された。

そして『觀經』に眞實の救済ありといふ金剛の眞心を三經の上に綜合して、

「然者濁世能化釋迦善逝宣<sub>ニ</sub>說至心信樂之願心<sub>ニ</sub>報土眞因信樂爲<sub>レ</sub>正故也、是以大經言<sub>ニ</sub>信樂<sub>ニ</sub>如來誓願疑蓋無<sub>レ</sub>雜故言<sub>レ</sub>信也、觀經說<sub>ニ</sub>深心<sub>ニ</sub>對<sub>ニ</sub>諸機淺信<sub>ニ</sub>故言<sub>レ</sub>深也、小本言<sub>ニ</sub>一心<sub>ニ</sub>二行無<sub>レ</sub>雜故言<sub>レ</sub>一也、復就<sub>ニ</sub>一心<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>深有<sub>レ</sub>淺、深者利他

眞實之心是也、淺者定散自利之心是也」

といつて、報土の眞因は疑蓋無雜の信樂であり、それを『觀經』で深心、『小經』では一心と説いた。然れば隱彰の實義から云へば三經異るところはないと隱顯釋の意義を明瞭にせられたのであつて、こゝに『觀經』の地位が愈々明かにせられるのである。

然るにこゝに開出せられた助業雜行等の要門の諸行は聖道門の諸行と内實に於いて異なるものではない。それ故にこゝに聖淨二門の難易が問題となるので、

「依<sub>レ</sub>宗師意云<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>心起<sub>レ</sub>於勝行門餘<sub>ニ</sub>八萬四千、漸頓各稱<sub>ニ</sub>所宜<sub>ニ</sub>者則皆蒙<sub>レ</sub>解脫、然常沒凡愚定心難<sub>レ</sub>修息慮凝心故、散心難<sub>レ</sub>行廢惡修善故、是以立相住心尙難<sub>レ</sub>成故言<sub>レ</sub>縱盡<sub>ニ</sub>千年壽<sub>ニ</sub>法眼未<sub>レ</sub>曾開、何況無相離念誠難<sub>レ</sub>獲、故言<sub>レ</sub>如來懸知<sub>ニ</sub>末代罪濁凡夫<sub>ニ</sub>立相住心尙不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>得、何況離<sub>レ</sub>相而求<sub>レ</sub>事者如<sub>レ</sub>似無<sub>ニ</sub>術通<sub>ニ</sub>人居<sub>レ</sub>空立<sub>レ</sub>舍也、言<sub>ニ</sub>門餘<sub>ニ</sub>者門者即八萬四千假門也、餘者則本願一乘海也」

とまづ『玄義分』序題門の門餘八萬四千の文を取りあげ、その聖道八萬四千の法を定散二善とし、常没の凡愚はこの定散二善の修し難きことを示された。この八萬四千の難修の法門に對し、門餘とは本願一乘海であつて、こゝに聖淨二門の立場を明かにせられた。『一念多念文意』九に左に

「おほよそ八萬四千の法門はみなこれ淨土の方便の善なり。これを要門といふ、これを假門となづけたり、この要門假門といふはすなはち無量壽佛觀經一部にときたまへる定善散善これなり、定善は十三觀なり、散善は三福九品の諸善なり、これみな淨土方便の要門なり、これを假門ともいふ、この要門假門よりもろゝの衆生をすゝめこしらへて、本願一乘圓融無碍眞實功德大寶海をしへすゝめいれたまふがゆへに、よろづの自力の善業をば方便の門とまう

すなり」

とあるのもこの意味である。

かくて

「凡就一代教於此界中入聖得果名聖道門云難行道、就此門中有大小漸頓一乘二乘三乘權實顯密豎出豎超、則是自力利他教化地方便權門之道路也、於安養淨刹入聖得果名淨土門云易行道、就此門中有横出横超假眞漸頓助正雜行雜修專修也」

と明確に聖淨二門を分ち、その内容を規定せられた。こゝに注意すべきことは聖道門を指して自力利他教化地方便權門之道路と云はれたことであつて、かくの如き八萬四千の法門を勧め給ふのを宗祖は菩薩の還相回向と見られたといふことである。これらの諸教は勿論自力の教であるけれども、それは還相の菩薩が衆生救済の利他教化地の果から出現し、かくの如き權假方便の教をもつて衆生を誘引し遂に弘願眞實の本願一乘海に入れしめ給ふといふ意味である。凡そ釋尊一代の教に聖道淨土と相對立する二の別な法門がある筈はないのであつて、聖道門とは淨土の還相の菩薩が衆生の機に應じて示し給うた方便の教であつて、そこに釋迦の方便と云はれる意味があるのである。こゝにわれわれは「化卷」が眞假相對、聖淨相對、内外相對を通して、淨土の假門も聖道門も外道も、凡て一切衆生を本願一乘海に入れしめる爲の還相菩薩の具體的力用であることを知ることができる。

かくの如く聖淨二門の教に就いてその意義を明かせられた宗祖は、更に行に就いて正雜二行專雜二修の精細な批判を下されたのが已下である。然し、今我々の問題とする論點は既に教に就いて明かにせられたから、行の批判に於ける内容に就いてはこゝでは省略したいと思ふ。たゞ横超漸教定散三福九品自力假門に對し、

「横超者憶念本願、離自力之心、專修者唯稱念佛名、離自力之心、是名横超他力也」

と云はれ、横超他力の行は、自力之心を離れるにあることを明かにし、それが却て方便の行に依て明かにせられる點を明されたことを注意すれば足るのである。かくて正雜二行專雜二修の精密な批判を経て、

「據經家披師釋、雜行中雜行雜心雜行專心專行雜心、亦正行之中專修專心專修雜心雜修雜心、此皆邊地胎宮懈慢界業因、故雖生極樂不見三寶、佛心光明不照攝餘雜業行者也、假令之誓願良有由哉、假門之教忻慕之釋是彌明也、二經之三心依顯義異也、依彰之義一也、三心一異之義答竟」

と結んで方便の行信全く化土の業因なることを明かにし、その方便を結んで「假令之誓願良有由哉」とその意義を明かにせられたのである。

以上に於いて、至心發願之願の願意を開顯した『無量壽佛觀經』の意は明かにせられた。こゝに宗祖は進んで、至心回向之願の願意を開顯した『小經』の意を明かにしようとするのである。そしてまづ一經の宗要を掲げて、

「就方便眞門誓願有行有信、亦有眞實有方便、願者即植諸德本之願是也、行者此有二種一者善本二者德本也、信者即至心回向欲生之心是也、就機有定有散、往生者此難思往生是也、佛者即化身、土者疑城胎宮是也」

と云ひ、此經にも顯彰隱密之義あることを釋してゐる。而して『小經』の隱顯は『觀經』に准知して立てられたのであるが、それは隱顯が廢立に對して云へば、信について立てられるものであり、既に『觀經』の機法に就いて隱顯が立つならば、『小經』の法は善本德本としての名號であつて、よし法に隱顯は立てられないにしても能修の機に就いては隱顯が立てられるからである。即ち『小經』にあつては、「不可以少善根福德因緣」と諸行を貶め、「聞說阿



彌陀佛執持名號」と念佛を勧めて、それは『觀經』の流通にあらはされた「持無量壽佛名」を受けたものであるから諸行の假に對し、念佛の眞實を勧めたものではあるけれども、それは善本徳本として自力で稱へる稱名に過ぎない。従て一心不亂とあつてもそれは自利の一心であり、法は弘願の念佛であつても機は定散自力の心であるから、往生は難思往生であり、土は方便化土である。これが『小經』の顯の義である。それ故に

「准ニ知觀經ニ此經亦應有顯彰隱密之義、言顯者經家嫌ニ一切諸行少善ニ開ニ善本徳本眞門、勵ニ自利一心ニ難思往生、是以經說ニ多善根多功德多福徳因縁、釋云ニ九品俱回得ニ不退、或云ニ無過念佛往西方三念五念佛來迎、此是此經示顯義也此乃眞門中之方便也」

と云ひ、『小經』が實に眞門中の方便であり、この方便を通して眞實があらはれてゐることを注意してゐられる。従てその眞實、弘願の立場から見れば、眞門の機を誘引して弘願眞實に入らしめる方便であり、その方便を説く釋迦であるけれども、これを具體的にあらはすところに還相回向の表現を見ることができらう。それ故に次に隱の義を示して、

「言彰者彰眞實難信之法、斯乃光闡不可思議願海、欲令歸無碍大信心海、良勸既恆沙勸信亦恆沙信故言甚難也、釋云直爲彌陀弘誓重、致使凡夫念即生、斯是開隱彰義也」

とひとへに名號不思議の信心を勧めてゐられる。かくて『小經』の隱顯が『觀經』に准知すると云はれるのは、『小經』にあつては隱顯が能修の機に就いて所修の法には通じないからである。そしてこの隱の義に据して、經の執持や一心を釋し、此經が無問自說の經であることに注意してそれが釋尊出世の本懷、佛の正意をあらはす經であるとせられた。

さればこそ四依弘經の居士、眞宗念佛を開いて濁世の邪偽を導き給うたのであると『三經』を結び、この三經一致の立場から、

「今按三經皆以金剛眞心爲最要、」

と弘願の信心を讃えられ、はるかに三一問答に應ずる意味を明かにして、

「三經一心之義答竟」

と結ばれた。

かくて眞門方便の意味を明かにせられた宗祖は、從假入眞の過程として、方便の要門を出で、方便の眞門に入るべきことを勧められる。即ち、

「夫濁世道俗應速入圓修至德眞門願難思往生」と

といつてまづ濁世の道俗は十九願にあらはされる如き諸行往生の假門を捨て、至徳の尊號を圓修する眞門に入り、速かに雙樹林下の往生を離れて難思往生を願へと勧め、後の三願轉入の體驗の告白に應じてられる。まことに要門より眞門へといふところに、限りなき大悲攝化の方便があるのであつて、かうした方便權門の道路はまさしく利他教化地の益として、還相回向の働きであることが宗祖の深い内面的感激であつたに違ひない。それ故に次には、方便の行信を明かにして、

「就眞門之方便有善本有徳本、復有定專心復有散專心復有定散雜心」と

と云ひ、その雜心と專心に就いて明確な判釋を施し、更に善本徳本の行を釋して、一切善法の本なるが故に善本と云ひ、又十方三世の徳號の本なるが故に徳本と云ふと云ひ、こゝに二尊の悲化を示して、

名「檀諸徳本之願」

「然則釋迦牟尼佛開演功徳藏勸化十方濁世、阿彌陀如來本發果遂之誓願也。二十  
悲引諸有群生海、既而有悲願」

と釋迦の方便が彌陀の悲願に基くことを明かにし、以て大悲攝化の善巧をあらはしてゐられる。この大悲の巧方便こそ選相回向の根源なのであるから、かうした方便施設は菩薩の選相回向を通して具體化されることが仰がれるのである。『淨土和讃』に

「至心回向欲生と 十方衆生を方便し、

名號の眞門ひらきてぞ 不果遂者と願じける

果遂の願によりてこそ 釋迦は善本徳本を

彌陀經にあらはして 一乗の機をすゝめける」

といふのもこの意味である。こゝに方便眞門の開顯が終つて、次に廣く經釋の文廿八文を引用してゐられるが、その中、初の十八文は眞門に就いての引文であり、後の十文はひとへに信を勸めて、『阿彌陀經』の隱の義を明かにせられたものである。そしてそれを結んで、

「眞知專修而雜心者不獲大慶喜心、故宗師云、無念報彼佛恩、雖作業行、心生輕慢、常與名利相應故、人我  
自覆不親、近同行善知識、故、樂近雜緣、自障々々他往生正行、故、悲哉垢障凡愚、自從無始已來、助正間雜、定散心雜、  
故出離無其期、自度流轉輪迴、超過微塵劫、難歸佛願力、難入大信海、良可傷嗟、深可悲嘆」

とこゝに宗祖の限りない悲傷が敍べられてゐる。思ふに、『教行信證』には「慶哉」といふ慶嘆の言葉と、悲哉といふ悲傷の言葉が交錯してゐる。この悲喜の交錯の中に宗祖の深い信仰體驗が示されてゐるのであつて、この悲あれ

ばこそ慶喜せられ、慶喜の中にまた限りなき悲傷があつたのである。こゝに宗師の言は『禮讚』五右に示された雜修十三失の中の後の四失であり、要門下に引用せられた先の九失と共に、こゝでは特に專修雜心の失として、深い機の反省が示された。而してかくの如き專修雜心の失は何に依るかと云へば

「凡大小聖人一切善人、以ニ本願嘉號一爲ニ已善根一故不レ能レ生レ信、不レ了ニ佛智一、不レ能レ了ニ知建一立彼因一故無レ入ニ報土一也」

と自力稱名の過失を適確にうち出してゐられる。そしてこの後に有名な三願轉入の文が置かれてゐるのであつて、是に愚禿釋の鸞、論主の解義、宗師の勸化に導かれて、要門から眞門、眞門から弘願へ轉入することができたことを喜び、

「果遂之誓良有レ由哉」

と二十願の願を讃えると共に

「爰久入ニ願海一深知ニ佛恩一爲レ報謝至德一據ニ眞宗簡要一恆常稱ニ念不可思議德海一彌喜ニ愛斯一特頂ニ戴斯一也」

と眞假三願の展開は全く大悲攝化の波瀾であり、如何にしてもわれらを弘願の信心に歸せしめんが爲であつたことを限りない感激の筆を以て記されてゐる。そしてこの大悲攝化の大用の中に、宗祖は還相回向の具體的表現を拜まれたのではなかつたであらうか。

○

上來、『觀』『小』二經にあらはれた隱顯の義を明かにして、要眞二門の方便の意味は明瞭にせられた。従て願の眞假から佛土の眞假を分ち、その業因に及ぶ「化卷」の本來の意味は明し盡されたといつていゝ。然し、宗祖が「信

卷」に於いて眞佛弟子を明すに就いて、

「眞言對<sub>レ</sub>僞對<sub>レ</sub>假也」

と云ひ、その假の中には聖道の諸機、淨土定散の機を含み、また僞は六十二見九十五種の邪道であることが示されてゐる。それ故に要眞二門に於いて、弘願の眞實に對し、淨土定散の機の假なる所以と、その假が持つ意味は明かにせられたけれども、聖道の諸機としての假、六十二見九十五種の邪道と云はれる僞に對しては、それが假と云はれ僞といはれる批判とその意味が明かにせられてゐない。こゝに宗祖は正像末の三時の興廢に依て聖淨二門に於ける權實の批判を與へ、又佛教の内道と諸他の諸教の外道とを相對せしめて、そこに眞僞の批判を加へられたのである。かくて、眞假對、聖淨對、内外對の三重の批判を通して、本願眞實の念佛が明かにせられると共に、假といはれ、僞といはれるものが如何なる意味を持つかと明示せられたのであつて、こゝに『教行信證』の教義體系が完備するのである。

凡そ『教行信證』の全體的理解に於いて、往還二回向をその綱要とするならば、それは自利々他門といふことができる。凡そ『教行信證』の四法を綱要とするならば、それは因果門といふことができるであらう。因果門の立場に立てば、眞實行信の因に依て眞實の證が得られることを明すのであつて、その場合還相回向は寧ろ眞實證の中に含れて四法の中に攝り、從て眞佛土は所歸の身土、その眞佛土卷から開かれ「化身土卷」は、化の身土とその業因を明すことに依て方便の教行信證が示され、そこに眞假批判の體系が成立するのである。『教行信證』が淨土眞宗を開顯する證權として、かくのごとき眞假批判がなされねばならぬことは當然であり、そこに聖道に對し、更には外教に對して、假借なき眞假の批判がせられたのであつた。然し、またこれを前の如く自利々他門で理解するならば、往相回向に就いて眞實の教行信證があり、還相回向はその眞實證から展開して、利他の大用を示すものであつて、その相狀を明すものは、

「一言還相回向者則是利他教化地益也」と示された已下「眞佛土・化身土」兩卷に及ぶと見られるのである。然もこの二の立場は、相對絕對、順觀逆觀といふ語であらざる見方に通ずるもので、決して矛盾することなく察ろ相依相成して、『教行信證』の意義を明かならしめるものと云ふことができる。

されば今聖淨相對、内外相對の場合にも、それは聖道の假、外教の偽を批判しつゝ、却てその聖道、外教が眞實弘願を開顯する素材であり、かうした假偽すらも還相の大悲攝化のはたらきと見られたのが宗祖の深い領解であつたと思はれる。この意味に於いて聖淨の批判も内外の批判も深い意味を持つこととなるであらう。

かくて宗祖は三願轉入の文に次いで、三時の興廢を示して聖淨二門の權實を明かにせられた。即ち、  
「信知聖道諸教爲<sub>二</sub>在世正法<sub>一</sub>而全非<sub>二</sub>像末法滅之時機<sub>一</sub>、已失<sub>レ</sub>時乖<sub>レ</sub>機也、淨土眞宗者在世正法像末法滅濁惡群萌齊悲引也、」

と云つて、聖道の諸教は正法の時にこそ教行證を具するけれども、像末法滅の時機にあつては、たゞ教のみあつて行證はない。まことそれは、「末法五濁の有情の行證かなはぬとき」なのである。たゞ淨土眞宗のみが教行證の三法を具して、濁惡の群萌を救濟する眞實の教なのである。それ故に後序の始めには、

「竊以聖道諸教行證久廢、淨土眞宗證道今盛」

と嘆ぜられたのである。そして淨土眞宗のみが濁惡の群萌を悲引する所以は、

「斯之經者則大聖自說也」

と結ばれた如く、それが佛の正説だからである。それ故に次に『大論』を引いて法の四依を示し、

「爾者末代道俗能可<sub>下</sub>知<sub>二</sub>四依<sub>一</sub>修<sub>レ</sub>法也」

と結ばれたのである。そして更に

「然據正眞教意、披古德傳説、顯開聖道淨土眞假教、誠邪僞異執外教、勘決如來涅槃之時代、開示正像末法旨  
際」

といつて、『安樂集』の時機を明せる文、或は『末法燈明記』に依て如來涅槃の時を考へて、今時末法なることを明すと共に、同書を引用して澆季末法の相を明かにせられた。蓋し、それに依て正像末の旨際を知らしめ、己が分を思量せしめんが爲であつた。その中にあつて、今わが身が本願一乗の法に乗ずることを得たのは、全く聖道の諸教に依て濁惡の機なることを自覺せしめられたからであると、聖道の諸教を批判すると共に、その恩恵を喜んで、そこに大悲攝化の還相の具體的な姿を拜されたのであらう。

更に末卷に於いては

「夫據諸修多羅、勘決眞僞教、誠外教邪僞異執者」

と云つて、内外二道を相對せしめて正邪を勘決せられるのである。而してこの末卷は全體殆んど引文のみで、そこには經文十二部、論文一部、師釋十部、外典一部、合して二十四部が引用せられてゐる。そしてその内容は頗る複雑多岐であるけれども、要は『辨正論』を引いて、その中に『涅槃經』の言として、

「道有九十六種、唯佛一道是於正道、其餘九十五種皆是外道」

と言つてゐるが如く、正因正果の上に立つて如實に三寶に歸するものは正であり、鬼神に事へて攘災招福を祈る邪因邪果に立つものは邪であることを明し、初に『涅槃經』『般舟經』を引いて、「不得事餘道、不得拜於天、不得祀鬼神、不得視吉良日」と云ひ、特に「悲歎述懷和讚」に

「五濁増のしるしには、この世の道俗ことごとく

外儀は佛教のすがたにて、内心外道を歸敬せり

かなしきかなや道俗の 良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつゝ ト占祭祀つとめとす」

とあるが如きものを批判せられたのである。それは當時の教界の姿でもあつたらうが、又形こそかはれ、何時の時代にあつても人間の生活がある限り、絶えることのない内心の姿でもある。かうした内心の姿に鋭い批判を加へられたのが宗祖であるが、それは常に信心の智慧に護られて打ち碎かれてゆかねばならぬものである。そして限りなく純化されてゆく信仰生活の内面に、常に仰がれたのは還相回向の大用であつたのである。されば「化巻」にあらはされた假と偽すらも、それがわれらを眞實弘願に入らしめんとの大悲攝化の善巧であり、その根源は勿論如來の悲願にあるけれども、その悲願の故に隨類應化して、如何にもして一切道俗を弘願眞實に引入せしめんとの還相回向のさが淨土の土徳として、又淨土の菩薩の徳として發動するのであるから、かうした大悲攝化の中にこそ、還相回向の具體的な表現を仰がれたものといふことができるであらう。それ故に、宗祖が内外の眞偽を勘決し給ふに二つの意味のあることが、住田智見師の『六要鈔私纂』(教行信證の研 究六九〇頁)に注意せられてゐる。

一 一向專念の宗義を明かならしめ、餘道に事ふべからざることを示すなり

二 念佛行者は自ら諸神冥道の守護することを示して、別に餘神を崇むべからざることを現はさんが爲なり

と云ひ、又諸神に對する態度として、

一 内證に約すれば彌陀の本願を信受せしめん爲の方便に、權りに神とあらはれ給ふが故に、念佛を信ずれば我が本



意と思召して喜び給ふなり

二諸神と現れ給へる上では、凡夫外道の相に示同して出世間の道を現はさざるが故に、之に事ふべからざるなり

と云つてゐられる。この意に依れば、諸神もまた還相回向の菩薩と仰がれた意が明かであつて、この點からも「化卷」が還相回向の具體的表現であるといふことは明かと云はねばならない。

そして、『安樂集』と『華嚴經』を引用して連續無窮に生死海を盡さんとの意を示された文がよく還相回向の無窮の多用を結ばれた文であることもよく領解せられるのである。 (完)

〔註〕 ①『唯信鈔文意』<sup>一八</sup>

左